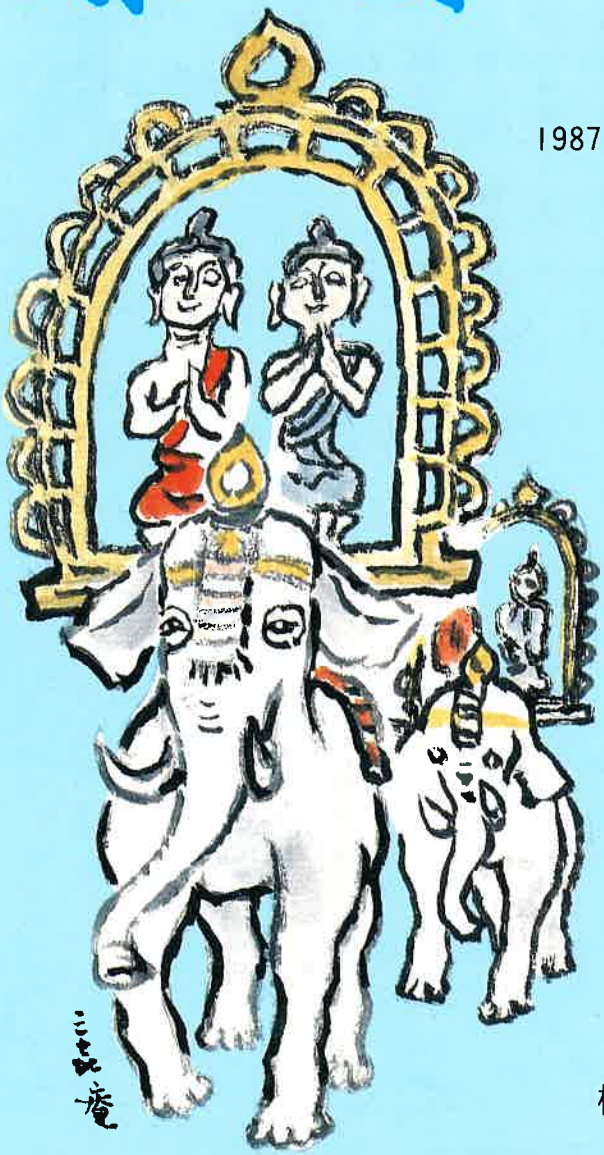
第 7 巻

成寿

SEIJU

夏季

1987



横浜 善光寺刊

謹啓 向暑の御全家御清昌の段
大慶至極に存じます
皆壽 第七号をお送り致します
宗祖を通して釋尊に還る意が私の
念願であります その為にもよおさせて
インド佛蹟参拝をと考えましたが
今回はインド特集といたしました
暑い季節ではございますがより暑い国
インドに想いを馳せていただきます
時節柄御自愛を望てお過ごください
たく又御協力をお願い申上ます

敬具

六月吉日

東京都小金井市 黒田史園
（武志）

各位

阿羅漢

経べき道を
過ぎおえ
うれいなく
一切において解脱をえ
ありとあらゆる纏結を
断ちきれる人に
熱悩あることなし

「法句経」

成・寿

SEIJU

1987 夏季

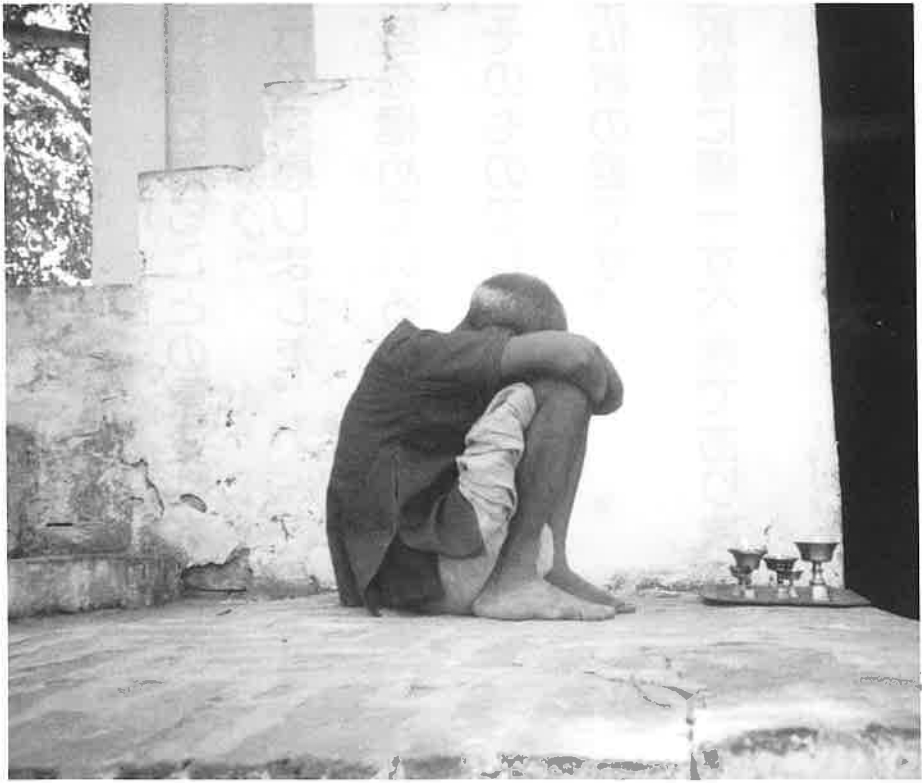
宗祖を通して釈尊に還ることの重要性を、今回のインド旅行で痛感しました。

各宗本山が殷盛（いんせい）を極めているのに反し、インド仏蹟は寂寥そのものでした。

これが今日の仏教の姿です。

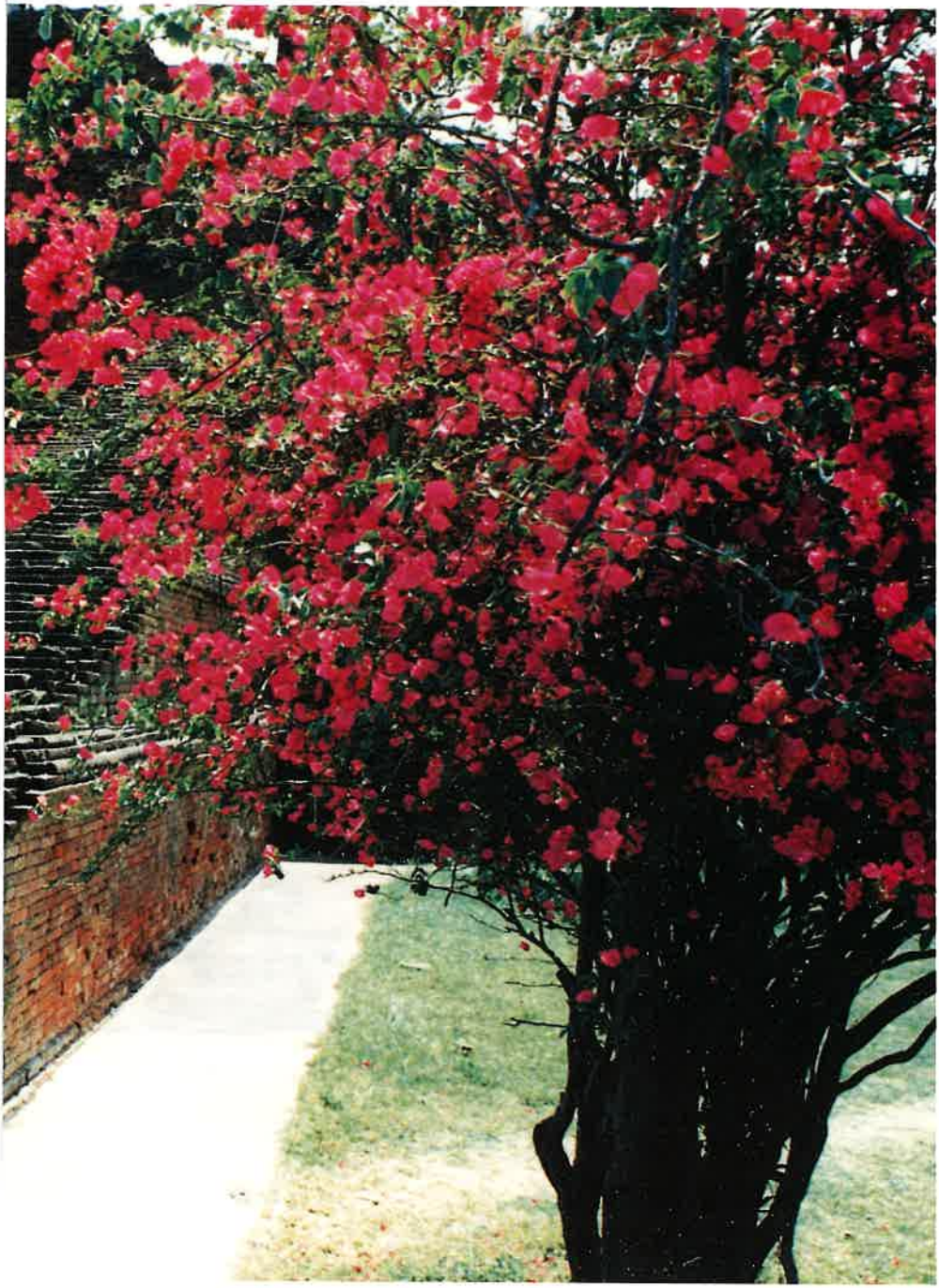
宗派をこえて釈尊に帰一すべきであります。

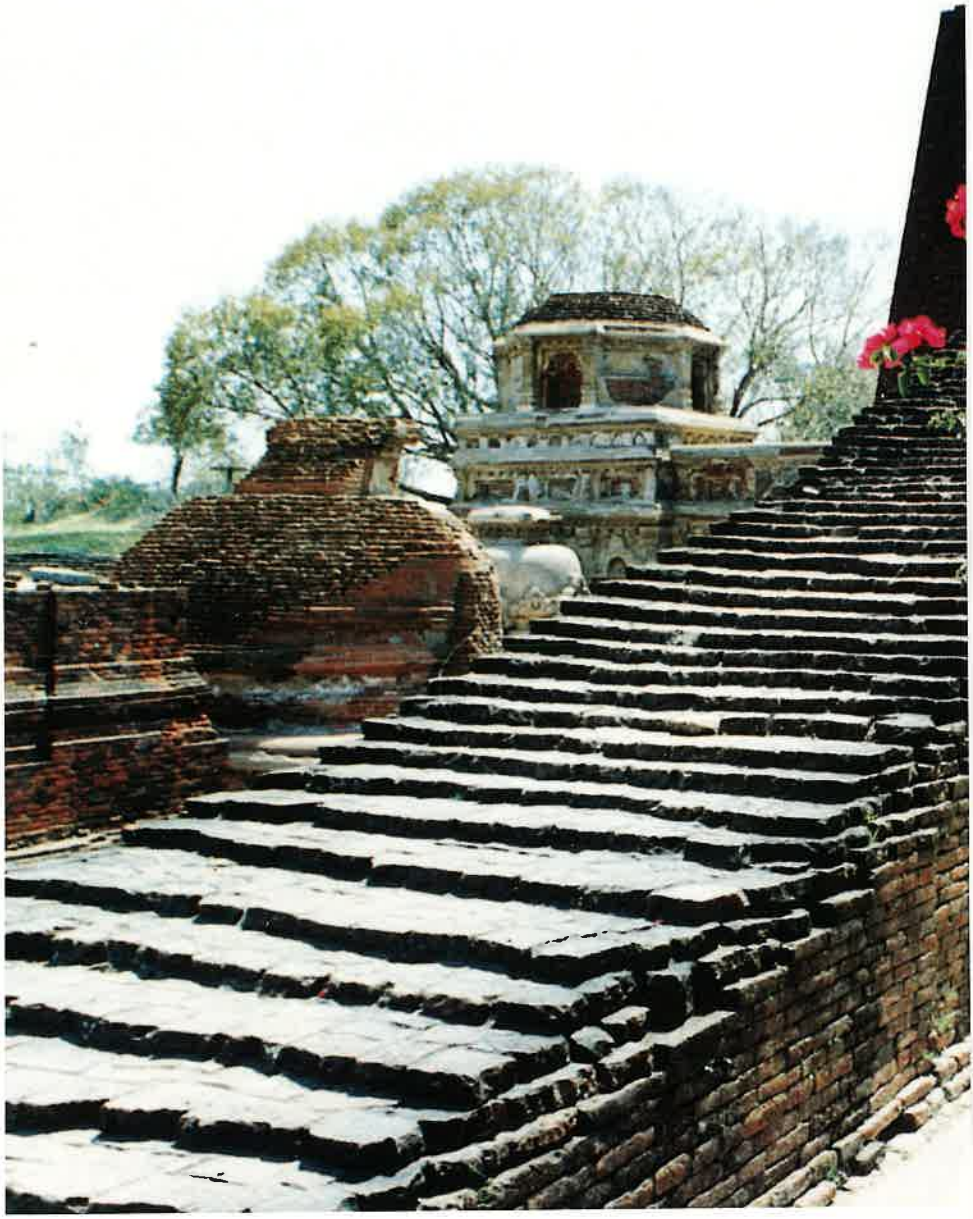
釈尊誕生の地
ルンビニ



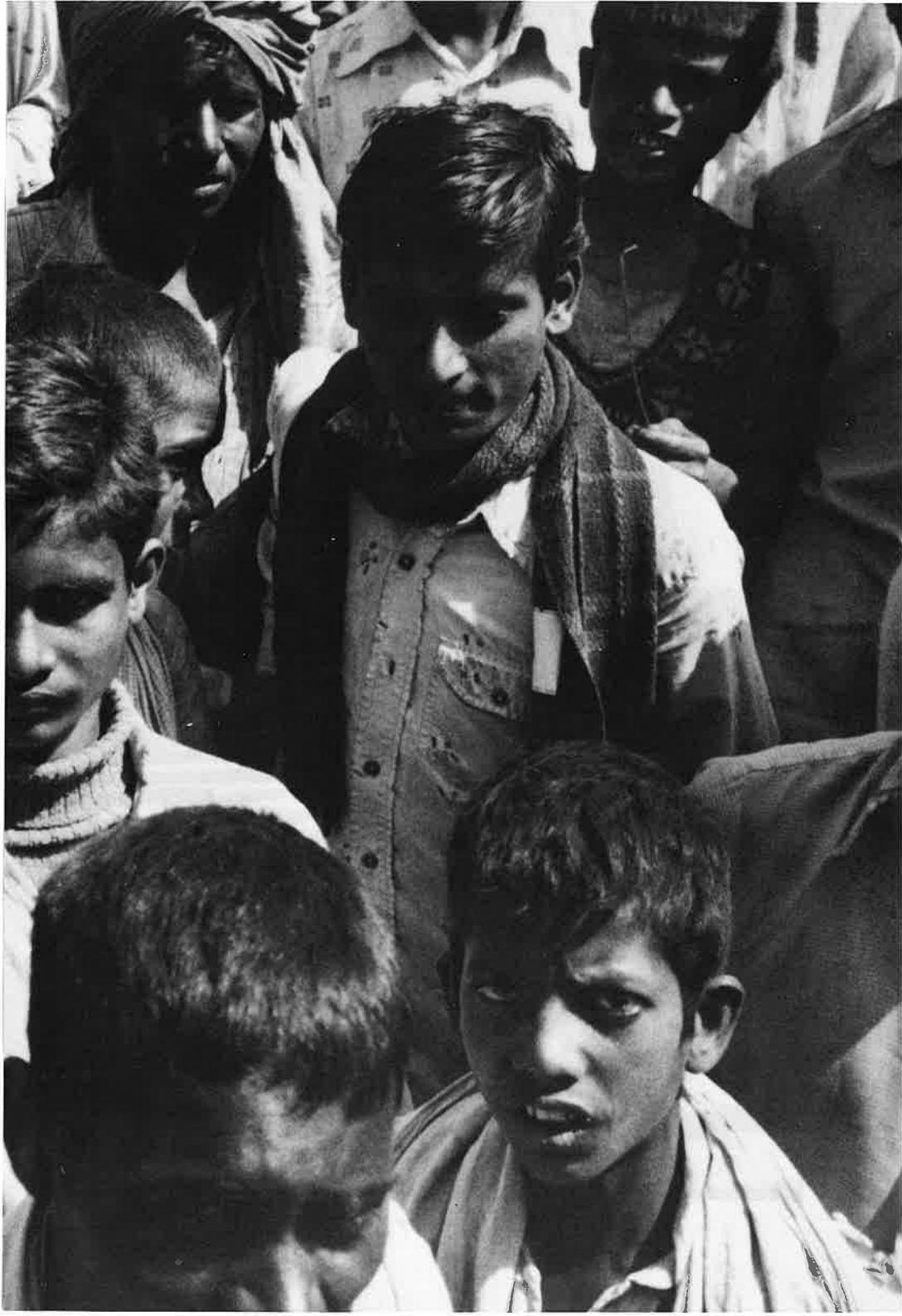
堂守りの老人

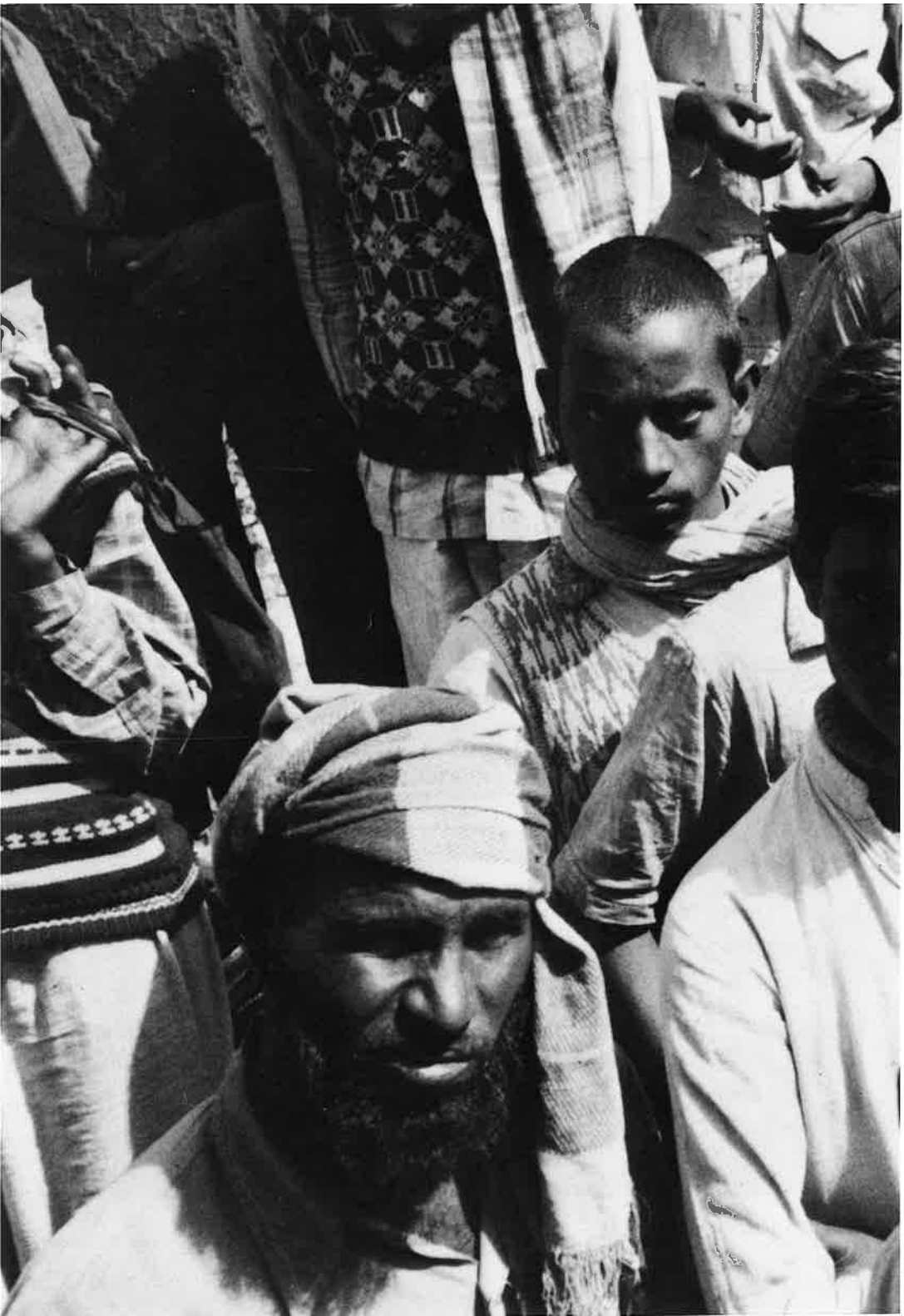
マヤ夫人堂





ブーゲンビリアが咲きこぼれるナーランダ大学跡

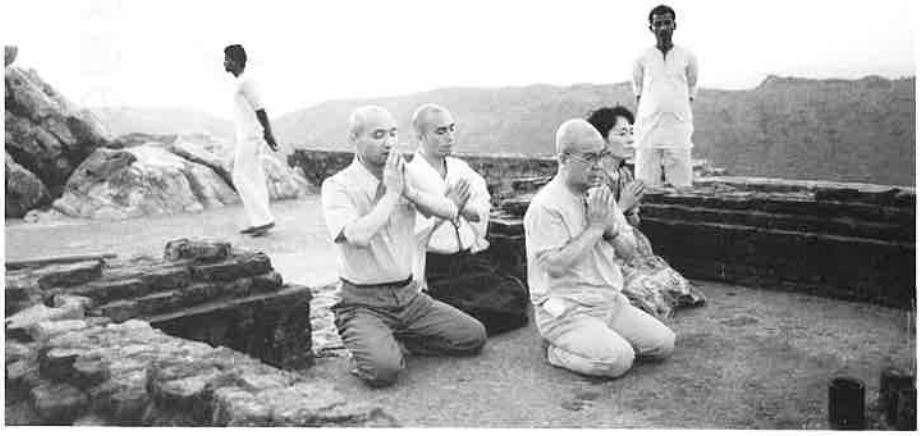




サールナート（鹿野苑）ダメークストゥパ

成道の地
ブッダガヤ

金剛宝座にて

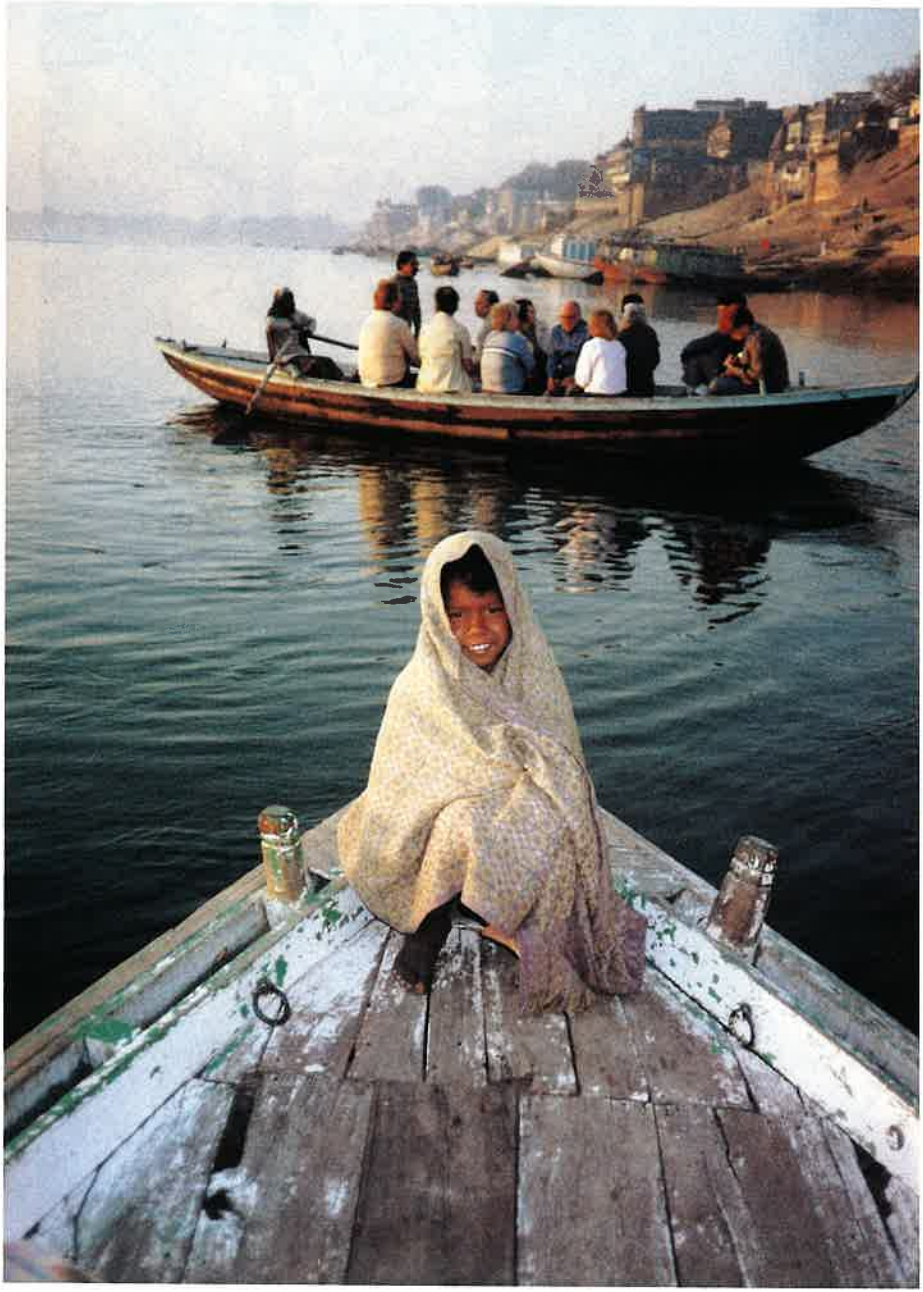


霊鷲山

一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら心命（しんみょう）を惜しまざれば、我及び衆僧はともに霊鷲山（りょうじゅせん）に出づるなり「法華経・寿量品偈」

中腹から頂上を望む

涅槃の地・クシナガラの沙羅双樹



ガンジス河の少年

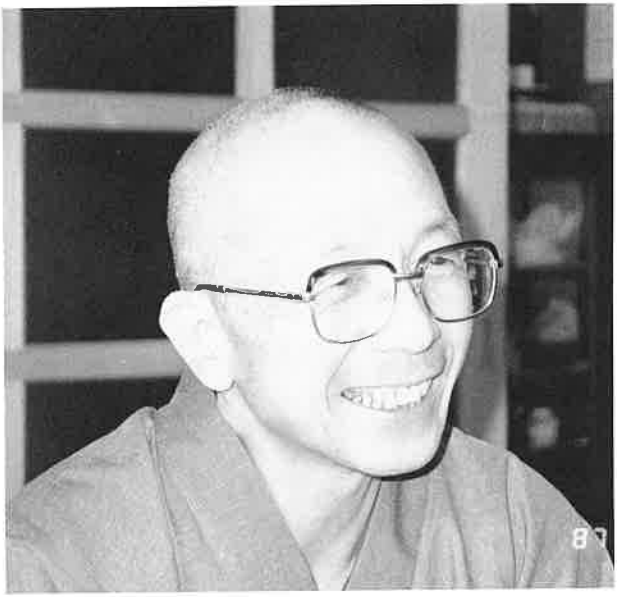
水の去った尼蓮禅河

ガンジスの沐浴

阿羅漢(ひじり)　「法句経」……2
カラー　■インドへ……高崎　直道　18
特別寄稿　■インド留学のころ……黒田　大圓　22
法話　■お釈迦さまのご誕生……佐藤　俊明　28
旅行記　■インド旅行記……阿部　慈園　55
留学記(その2)　■学問の町プーナー……保坂　俊司　58
インドで仏に会う……東　隆真　61
エッセイ　■禅と衣食住(三)　手巾……赤間　義徳　67
■21世紀の扉……岩波　弘道　70
論文　■21世紀の仏教と私の役割……浦田　智司　73
未来社会の仏教と私……島崎　義孝　76
21世紀の仏教と私の役割……李　幼麟　82
良寛さんに魅せられて……河内　義宣　86
レポート　■アメリカ・禅・センター報告……93
善光寺だより　■……101
読者からの便り　■……
詩　■法乳かんのん……遠藤　太禅
The Ebitor's Postscript　カット・題字●伊藤三喜庵
編集後記　□絵・写真●五十嵐千彦

●特別寄稿

インド留学のころ



早稲田大学教授
高崎　直道

本誌前号で中村先生が私のインド留学当時のことを述べられ、いささか過分のお賞めに預って恐縮していたところ、今回さらに留学体験について本誌へ寄稿の御依頼を頂戴した。今さら昔話で恥さらしでもあるまいと躊躇したが、何ほどか後輩の皆様の参考になることがあればと思い直して、お引受けすることとした。

私の留学体験は昭和二十九年七月にはじまる。第四回のインド政府給費留学生三名のひとりに選ばれたわけだが、覚束ない英語で大使館の口

述試問を受けたのに合格出来たのはひとえに中村先生の御推挙のおかげと思っている。サンフランシスコ講和条約発効後、間もない頃で外国留学はまだ物珍しかったせいか、ジャパンタイムスが報道してくれたり、神戸から乗船するため東京を発つ時、印哲研究室総出のお見送りをうけ、花山先生が駅頭で万歳三唱の音頭をとられて、恐縮したのを覚えている。神戸からの船旅二十四日間は、はじめての外国人との間の生活に慣れるのに大いに役立った。

留学先はボンベイ州のプーナで、そこにある、インド学で世界的に有名なバンダルカル東洋研究所のゲストハウスに住むこととなった。留学先についての情報は中村先生が学会誌（『印度仏教学研究』）に毎号書いて下さっていたのによったわけだが、伝統ある研究所であること、優れた仏教学者、ババット、ゴーカレー両先生のおられること、場所がデカン高原で比較的涼しく、静かな環境であることなどで、勝手にひとりできめてしまい、中村先生にゴーカレー先生への紹介状を書いて頂いたり、今考えると随分あつかましいお願いをしたものである。

プーナには当時、龍谷大学の木村秀雄先生（故人）と、京大出身の大地原豊さん（京大名誉教授）が滞在しておられた。お年寄り（といっても当時五十才ぐらい）の木村先生はさておき、世代の同じ大地原さんとの出会いは私にとって運命的とでも言うべきもので、以後の長いおつき合いで私は目に見えないところで多くの恩恵を蒙っている。ゴーカレー先生はインド人　れした温厚篤実な学者でその下で以後二年半勉強出来たことが、私の今日ある最大の理由と言ってよい。またプーナにいたお蔭で、内外の有名学者にお会い出来る機会が多かった。そのひとりローマの中極東研究所（イズメオ）のツッチ先生は其後、私のph論文の審査員をひきうけて

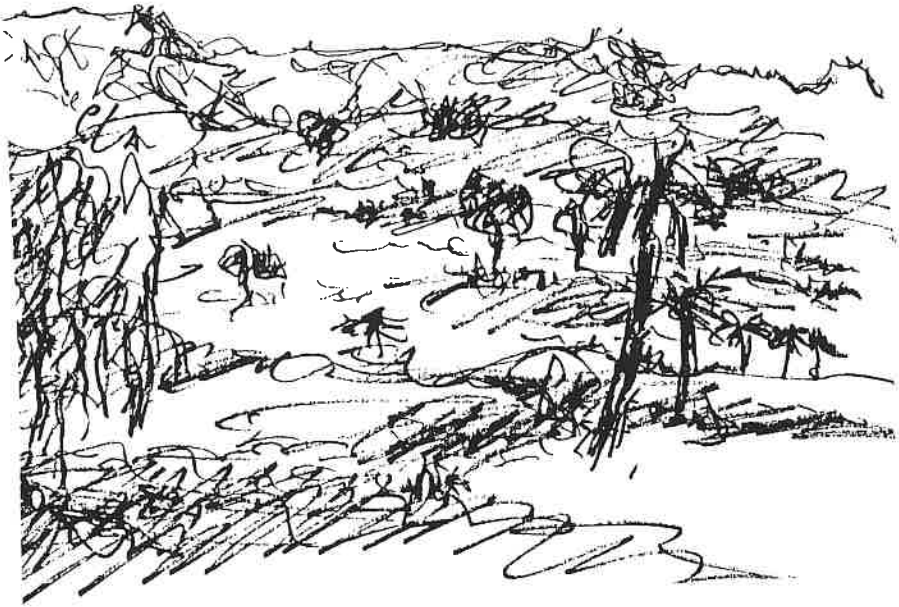
下さり、さらに論文を光栄あるイズメオのシリーズに加えて下さった。これはすべてゴーカレー先生の御推挙による。

留学中一番大事なことは所期の目的たる研究の遂行にあることは言うまでもないが、そのためには毎日の生活が楽しく張りのあることが大事だし、また適宜の休養や娯楽が必要である。

私の留学中最初に訪れた危機は、一月ほど大地原さんと一緒だった後、かれの帰国を送りがてら、アジャンタ、エローラの見物に出かけ、ジャルガオンの駅で東西に別れてプーナに帰って来た直後に強烈なホームシックに襲われたことであった。その克服に私の編み出したのが、日曜日は徹底して勉強を休み、すきなことをして時間を過すということであった。その手始め——これは好きなことと言うより、気を紛らすためと言うべきだが——部屋の窓のカーテン作りだった。町でカディー（手織り）の花柄プリントの安綿布を買って来て上下を縫い込み、紐をとおして引けるようにした。この手仕事で一日つぶして大いに満足したら、ホームシックが消えてしまった。

大ていの日曜日は自転車で走り廻るか、留学生仲間を訪ねる。月に一回ボンベイに出て英気を養い時には領事館などのお世話になって日本食を御馳走になる。機会を作ってはインド国内の旅行に出かける。こうして、二年半のインド生活を私なりにエンジョイした。幸い健康で、カシュミールで痔主となった以外、下痢ひとつしなかった。自転車旅行の際井戸水など平気で飲んだりしたのである。帰国したあと、皆からお前は極めてインド向きに出来ていると冷かされた。

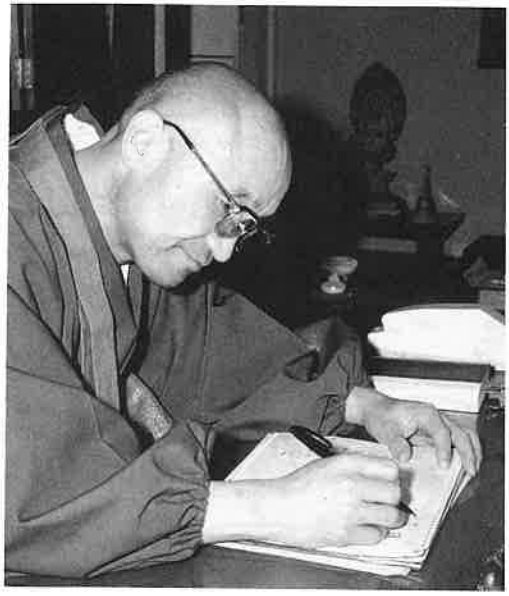
難儀なことにも色々ぶつかった筈だが、もう忘れてしまった。旅は無事済めば楽しい思い出だけが残るものである。留学生活もそれと同じ



ことか、恐らく人生もまたその通りかも知れない。

（右ではお金のことを述べる余地がなかったが、当時は日本から正規の送金は一切認められておらず、われ〳〵留学生はそれぞれに、方途を講じて、奨学金以外の金の入手につとめた。大ていは、インド駐在の商社員の留守宅に円貨を払い込み、商社又は駐在員からその月給の一部をインド・ルピーで受取るという方法である。それによって私は大たい月平均奨学金と同額のルピー貨（二〇〇ルピー）を得て、以て書籍入購と旅行費に充てることが出来た。これは多分、当時としては優雅な暮らしの部類に入ったことであろう。

イラストは「暮れゆくデカン高原」



お釈迦さまのご誕生

黒田　武志
（大圓）

仏教では、生老病死を四苦と申します。それは人間として、のがれることのできない宿命でありますが、生まれ落ちる時すでに持っていたという苦を、お釈迦さまは、どのようにして見つけられたのでしょうか。

私たち自身を振り返ってみましても、誰ひとりとして、生まれる瞬間の苦しみを憶えている者はありません。

生まれ出ずる苦しみについて様々な推測をすることができたとしても、現実の記憶というものは呼び覚ますことができません。お釈迦さまも、ご自身の出生に関しては、何ひとつ語り残されませんでした。

仏典には、お釈迦さまのご誕生の物語を、偉大な宗教家がこの世にお生まれになったという、よろこびの言葉で書き記しています。

お釈迦さまは、当時、大きな勢力を持っていたコーサラ国に従属する釈迦（シャカ）族の王子として、ルンビニという小さな村でお生まれになりました。

母上のマヤ夫人はコーリヤ族のご出身でしたから、お産をする為に里帰りをされる途中だったのでありましょう。ルンビニは、釈迦族のカピラ国とコーリヤ国の、ちょうど中ほどにある村でした。

ルンビニは花々が咲き乱れ、鳥が飛び交う美しい緑の園だったといわれております。

漢訳仏典では〝無憂樹〟と呼ばれておりますが、マヤ夫人が、赤い花をつけたその無憂樹を一枝折ろうとした時に、右脇からお生まれになったと書かれています。

その時、尊い人の出生を祝福して、天からは甘露が降りそそいだといわれます。四月八日の、お釈迦さまのお誕生を祝う花まつりに、誕生仏に甘茶をかける行事は、この時の故事に依るものであります。

そしてお釈迦さまは、東に向かって七歩あゆまれ、あの有名な「天上天下唯我独尊」と、初声をあげられたのであります。

誕生仏は、右手は天をさし、左手は垂れて大地をさしておられます。

〝あめが上にも、あめが下にも、我にまされる聖者なし〟と叫ばれたという伝記は、むろん、

お釈迦さまを神聖視するあまりの、作られた物語ではありますが、もう一歩深く、この言葉をかみしめてみますと、〝尊いのは私だけではない。世界中に、たったひとりの、尊い生命を持つあなたよ。その生命こそが尊いのだ。〟とも言っておられるように思います。

未来の仏陀を生んだマヤ夫人は、その七日ののちにお亡くなりになってしまいます。

マヤ夫人の死は、聖者を生んだという歓喜に色どられていたでありましょう。それが、仏陀の母親の宿命であったのかもしれません。

はじめに悲しみがあって、お釈迦さまは仏陀への道を歩まれたのではないでしょうか？

生まれると同時に母親を失うということは、人間として生涯負い続けなければならない悲しみであります。お釈迦さまが、なぜご自分の出生を語り残していないかということは、深い悲しみに裏打ちされているからだと思えてなりません。

生まれた時、どんなに母が喜んでくれたか、幸せにあふれた気持でどうやって抱きしめてくれたのか、そんな思い出をやさしく語り伝えてくれる母親はすでになかったのです。

慈しみにあふれた、やわらかな母の声も、あたたかな母の乳房のぬくもりも、お釈迦さまはお持ちではなかったのです。

お釈迦さまを聖視するあまりに、仏典は、人間としての根源的な悲しみを、一切きり捨ててしまっています。マヤ夫人の妹のマハープラジャーバティが、母のかわりにやさしく抱きしめてくれても、幼年のシッダルタ太子の胸の奥底はいかばかりだったでありましょう。

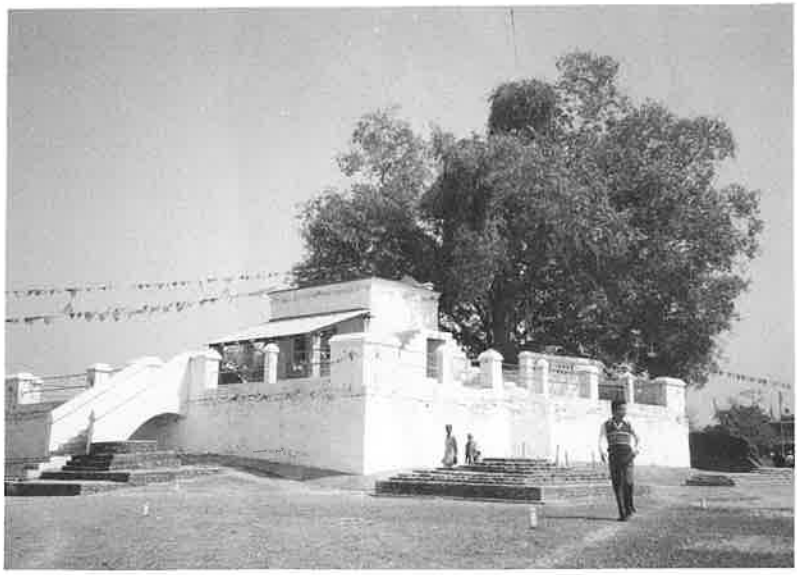
生を受けた時すでに深い悲しみと共にあり、紅顔もやがては老いさらばえていく無常と、病の苦しみを知って、死の恐怖におののく畏れを見据えておられた若き日のお釈迦さまは、し

かしそれが仏陀となるための宿命だったのでありましょう。

お釈迦さまは、決して、私たち凡夫の愚かな悩みを無視したりはなさいません。なぜなら、お釈迦さまもかつては一人の人間として悩み、苦しまれたからです。

一切を捨ててカピラ城から出離する時も、万感の思いを胸に秘めておられたはずです。父や、妻や、子や、臣民たちへの激しい愛を絶ち切らねばならなかった苦しみや悲しみは、測り知れません。はじめてのお子に、ラゴラ（邪魔者）と名づけられたのは、深く愛すればこそ、別離の苦しみがつのることへの畏れと、それ故に、別れの決心が揺らぎそうな自分への叱咤であられたろうと思います。

限りない愛と、限りない悲しみを込めて、〝ラゴラ〟と、血を吐く思いで叫ばれた父親の慟



ルニビニ・マヤ夫人堂

哭が、胸に迫ってまいります。

その時お釈迦さまは、ご自分がお生まれになった時のことを、重ね合わされておられたのではないでしょうか。

母親を知らずに育った自分は、今また愛しい我が子に、父親を知らぬ子としての道を歩ませようとしている。父として分け与え、残すものは、自分と同じ悲しみでしかないのか…。そして自分は、己れ自身の救いを得んが為に、数えきれない人間を悲しみに追いやろうとしている。

悟りを得られる前のお釈迦さまは、私たちと同じように苦しまれたのです。私もひとりの父親として、この時のお釈迦さまのお心をのぞいているのかもしれません。

一時の不幸に耐えて、やがては永遠の救いを与えられる日が来るわけですが、それがお釈迦さまの使命であり、ラゴラ王子の使命でもあったのです。

お釈迦さまがお生まれになったルンビニは、今は荒れ果てて、ひと気のない野原に、わずかな遺蹟が残っているばかりです。巡礼者以外は訪う人もありません。

仏教は、ここからはじまったのです。

ルンビニは、お釈迦さまの教えを受ける私たち仏教徒にとって、よろこびの聖地です。

しかし、お釈迦さまにとっては、悲しみのはじまりの場所だったのかもしれません。息を引きとられたクシナーラは、歩いて二日ほどのところだといわれます。

母と関ることのできた唯ひとつの場所。そのルンビニで、赤子のように母にすがりたいと思われたのでしょうか。

お釈迦さまの、尊い御教えと共に、生涯持ち続けられたであろう悲しみにも、思いを馳せていただきたいと思うのです。

合掌

インド旅行記

当山育英会常務理事
佐藤　俊明

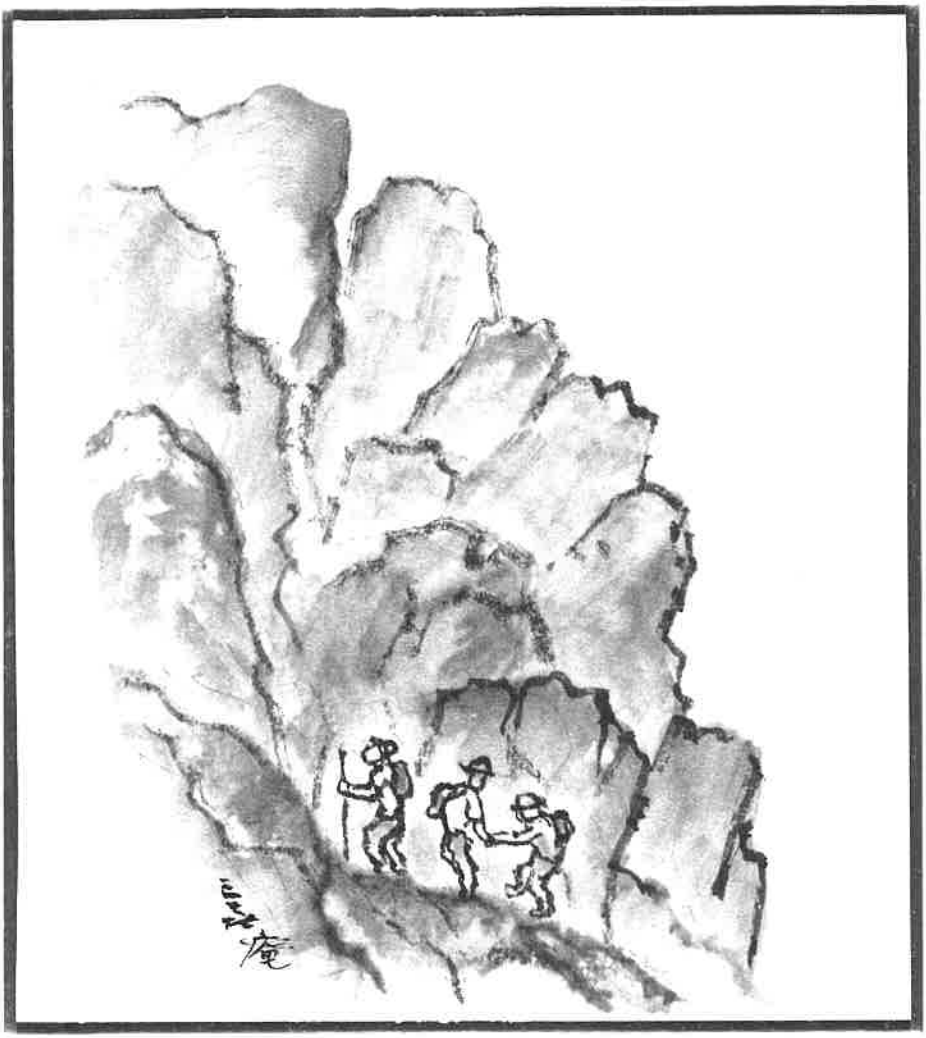
はじめに

善光寺海外留学僧派遣育英会は発足当初、タイ国ワット・パクナムとアメリカはロスアンゼルスの禅センターに留学僧を送ることから出発したのだが、その後、インド、スリランカへの留学希望者があり、現にインド、スリランカにそれぞれ一名留学僧を派遣している。

今後も留学僧を派遣するとなると、当然受入先を確保しなくてはならない。そのためにはなんとしても現地を訪れて調整をはからなくてはならない。それなら仏蹟参拝もしなくては、ということでインド旅行が計画された。

はじめは善光寺方丈さんと私との弥次喜多道中の予定だったが、日野屋（青木左右輔）さんが同行を希望された。日野屋さんは名カメラマンでもあるので、これは鬼に金棒と三人で出かけることになった。

女三人寄れば姦となるが、男三人を組み合わせた字がないので、姦といった特別な状態が生ずる恐れはないようだし、また男二人に女一人だと嬲(なぶる)という、これまた心配なことになるが、その心配もないし、気楽な男の三人旅、はたして十二日間、どんなことになるだろう。



一

三月二十五日、午后三時五十分、成田新東京国際空港を飛び立った。週一便のカルカッタ・ボンベイ行きなのに空席が目立つ。こんなことで採算がとれるのだろうかと思っていたら大阪で満席になったので成程と思った。学年休みのこととて子供連れが多い。中に子供連れの仏蹟参拝ツアーがあった。〝子供でも仏蹟参拝ができるようになったとはインドも近くなったものだ。それにしてもこの齢になるまで仏蹟参拝に出かけなかったとは怠慢至極なことだ〟と反省させられた。

今から一、三〇〇年前、玄奘三蔵法師がシルクロードを通ってインドに行った時は、「砂漠には悪鬼、熱風あり」「遇えばたちまち皆死して全き者無し」「空に一飛鳥なく、地に一走獣なし」「人骨、獣骨の類を以って行路の標識となすのみ」(『法顕伝』)といった実にけわしい危険な道をいのちがけで辿る旅だった。だから「入竺沙門」といえば称讃と尊敬を一身に集めたものである。ところが今日は飛行機で十時間少々で入竺できる。にも拘らず、色紙などに「入竺沙門　何某」などと麗々しくサインしているのを見かけることがある。玄奘三蔵気取りでいるのかと思うと片腹痛くなる。子供連れの仏蹟参拝ツアーを見せてやりたいものだ。

バンコクで乗客の乗り降りがあり、予定より三十分遅れてカルカッタ空港に着陸した。日本時間では午前四時である。入国手続・税関の検査(同行の青木氏の所持したビデオは特に綿密に調べられた)を経て到着ロビーに出ると、善光寺留学僧安井隆同君と、昭和女子大で教鞭をとっている早田啓子女史、それに全行動を共にして案内してくれるヒロ・マンシュカーニさん

が出迎えてくれ、花のレイを二つも首にかけてもらった。一瞬ハワイに到着したかのような気になったが、ロビーから一歩外に出た途端、インド到着の実感を押しつけられた。雑然とごみごみした人と車のはんらん。ふと、胸もとに黒い小さな手が幾本かのびて来て「マネー」「マネー」と哀願する声が耳に入った。見ればいたいけな子供である。この真夜中にかわいそうとは思ったが、一人にやればどっと押し寄せてくるから、支えぬほうがよいと旅行案内書にも書いてあるし、まだルピーに換金もしてないので無視した。

ホテルに着いたのが三時、日本時間では六時半なので丸々一晩徹夜したわけだが、飛行機で少々仮眠をとったせいか、それとも興奮のせいか眠くはない。もう水のようになっているシャワーを浴びてベッドに入ったが寒くて眠れない。日中クーラーがきいていたためだろう。起き上

って寝巻の下にセーターを着込んでようやく眠りについた。いい気持で眠っていたら電話のベルが鳴った。十時のモーニングコールか？　そんなに眠ったのかなァと、と思って受話器を取ると、「お茶の準備ができましたからどうぞ」という方丈様の元気な明るい声だった。時計を見たら七時。やはり眠れなかったのかと思い、仕度をして出かける。固型燃料で日本から持参した水をわかしている。インドではじめて飲む日本のお茶の味はまた格別だった。

カルカッタ最高のホテルとはいっても、特に水に関しては油断がならない。これだけの慎重さが必要なのである。ルームにあるポットの水は火を通したとはいうが、ほんとに煮沸したものかどうかは保証の限りではない。ヒロ氏も飲まぬようにと注意してくれた。

帰国してわかったことだが、このホテルで出した数枚の絵葉書はいずれも未着である。郵便物は郵便局でスタンプを押したことを確認しない限り信用はできないと聞いてはいたが、一流ホテルのフロントでさえ切手を金に換えてしまうのだから恐れ入る。航空便、わずか四ルピー、五十円程度のことだがこのていたらくなので、他はおして知るべしである。

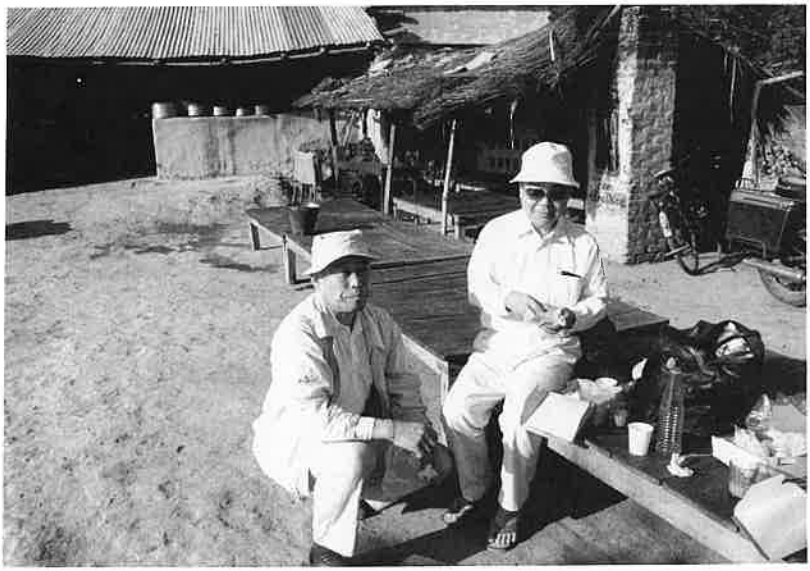
それだけインドは貧しいのである。安井君を指導してカルカッタ大学の助教授、勤続二十五年で月収わずか五〇〇〇ルピー、六五〇〇〇円とのこと。大学卒の初任給が七～八〇〇〇ルピーというから一万円ちょっと。土木作業員の日当が一五、六ルピーというから二〇〇円、敗戦直後ニコヨン(二四〇円)という言葉があったが、あの頃を思えば大体想像がつくのではなかろうか。

反対に金持となると、これまた日本では想像もつかない大金持が大邸宅を豪然とかまえている。

二

安井君がマザー・テレサの「死を待つ人の家」に案内してくれた。人口七億のインドでは路上で息を引き取る人の数は私共の想像をはるかにこえるものであろう。そうした路上に死を待つ人びとを収容し、食事を与え、治療を施し、死ねば荼毘まで面倒をみてやるのが「死を待つ人の家」である。私共が訪ねた時は折悪しくマザー・テレサは不在だった（彼女はほかに三つの施設をカルカッタに持っているという）。瞳の美しく澄んだシスターが応待してくれた。方丈さんはその浄業に対して金壱封を喜捨した。

男女別の棟に、列車のB寝台よりもせまいベッドが六〇センチくらいの間隔にずらりとならび、死を待つ人びとが寝ころがっている。奥にはヒンズー教、回教等、宗派別の霊安所があっ



茶店で

た。

西欧の人マザー・テレサがこのような施設を設けて救済の手をさしのべているのに当のインドではどうしているのだろうか。ふと、八年前カンボジア難民のキャンプを訪れた時のことを思い出した。そのころ、東南アジア難民の救済問題が国際世論をゆるがせており、ことに日本及び日本仏教徒に対する風当りは強く、「金は出すが難民の受入れを渋っている」「物はよこすが人はよこさない」「同じアジアの仏教徒同志でありながら、日本の仏教徒は何もしない」こうしたきびしい批判の中で曹洞宗はおくればせながら、といっても他の宗団にさきがけて、昭和五十四年二十人の調査団を現地に派した。私もその中の一員として、キャンプに出かけて難民の悲惨な姿をじかに確めることができた。

まず同じ仏教徒としてタイ国の仏教教団がこの問題にどう対処しているのか、できれば共同歩調をと思い、タイ国寺院を訪ねてみると、教団としてはなんら活動していないというよりは、戒律上、また僧団の機構形態からして、政治問題化するおそれのある対社会活動は禁止されているとのことだった。なるほどキャンプにはタイ僧の姿は見えない。逸早く救援の手をさしのべ、献身的に活動しているのはアジアの仏教徒ではなく、西欧のクリスチャンだった。彼等はボランティアとして機を失せずやって来ているのであった。

いま「死を待つ人の家」に来て、八年前の難民キャンプの再現であるかのように感じた。

インドの代表的な宗教はヒンズー教である。その教儀については一知半解を持たないが、タイにおける仏教がそうであるように、自らの救いが主眼であろう。カーリーガート寺院はヒンズー教の女神カーリーを祀るもっとも神聖な、カルカッタの守護神的な寺院で、カルカッタの

名はここに由来するといわれるが、ここでは幸運を求める信者が引き連れてきたいけにえの山羊の首がはねられている。こんな具合に自らの幸せを求めるのがさきで、死に瀕した人に手をさしのべることは考慮の枠外のことなのだろうか。

三

三月二十七日、四時起床、朝食は機内で食べることにして四時半空港に向けて出発する。インドの誇る国産車アンバサダーは悪路に強いのが自慢というだけにスプリングが堅くて乗り心地はジープなみ。おまけに乗った車がジーゼルエンジンだったのでＹＳ11なみの爆音だった。

道路は中央一・五車線ぐらいしか舗装されていない。すれちがったり追い越したりする時はよほどよけてもらわないとどちらか一方の車輪が舗装部分からはみ出てしまう。だから〝どけ！　どけ！〟といわんばかりにやたらに警笛を鳴らして威赫する。日中市内は雑踏をきわめスピードなど出せるものではない。その欲求不満の爆発か、早朝ほとんど車の通らない空港への道を、アンバサダーをフルスピードで飛ばす。前に走ってる車があるとさかんに警笛を鳴らして追い越すが、中に負けずにスピードを出す車があって、マフラーから火の粉を吹き散らしている。彼らはレーサー気取りでいるのかも知れないが、乗客の私共はたまったものでない。三十分ハラハラさせられてどうにか無事空港に着きホッとする。つけ加えておくが日本の神風タクシーどころではない。

二時間のフライトで八時十五分、ビハール州の州都パトナに着く。空港前には私共の一三〇〇キロの旅を運ぶアンバサダーが待っている。〝こんな車で大丈夫なのだろうか〟と不安にな

ったが、ヒロさんがよくチャーターしている車とのことなので運を天に任せることにした。

パトナは紀元前三世紀のころアショーカ王がここを首都にしたそうだが、釈尊の時代はまだ一小村に過ぎなかったという。

八十歳になられた釈尊は死期の迫ったことを身に感じられたのであろう。ある日、王舎城を出て故郷カピラバーツに向けて旅立たれるのである。ナーランダまで十二キロ、ナーランダから八八キロの道を歩まれ、ここパトナで大勢の弟子たちと別れ、阿難とごくわずかの弟子を連れてガンジス河を渡られるのである。釈尊が渡られた「ゴータマの渡し」にはそれらしい遺跡はないが、多分この辺だろうといわれるところに立って対岸バイシャリを望み見た時、酷暑のこの地で私より十歳年上の釈尊の旅はどんなにつらいものだったろう。「自分は老い朽ち、齢を重ねて老衰し、人生の旅路を過ぎ八十となっ

た。私の体は、ちようど古い車の革紐の助けによってやっと動いているのと同じようなものだ」と、釈尊は侍者の阿難に述べたという経典の言葉を思い出して涙を催すのであった。

「ゴータマの渡し」をあとにして、一路ナーランダに向った。途中、道路工事に伴なう渋滞に巻き込まれ、ナーランダに着いたのは一時過ぎだった。時速二〇キロしかのびないとは全く予想外だった。

ナーランダには西暦五世紀のころ大僧院が建てられ、その後数世紀にわたって大学として盛名をはせたところである。

七世紀の人玄奘三蔵が渡印の途次、益州空恵寺において病める老僧から原語で、般若心経を口授され、その後の旅において苦難に遭遇するたびにこれを唱えて難を免れたというが、玄奘三蔵はナーランダ寺においてこの病僧に再会するのである。するとその病僧は「われは観音菩薩なり」と玄奘に告げて中天に消えたという伝説があるが、ナーランダの僧院跡に立って、〝玄奘三蔵と病僧が再会したのはどのへんだろう？〟とあちこち見廻わしていると、いまにも玄奘三蔵がやってくるのではないかというような気がしてくる。ここの遺構がかもす幻想であろうか。

ナーランダからラジギール(王舎城)までは一二キロ、ほこりにまみれて法華ホテルに着き、日本語で出迎えられた時は、日本に帰ったような気持だった。

四

仏蹟参拝は十月下旬から三月中旬までが適期で、その前後はほとんど参拝者がないという。また、シーズン中といえども参拝者は決して多いものではなく、法華ホテルの昨年の実績は三、五〇〇人、うち日本人は一、七〇〇人とのこと

だった。精々この程度のことなので、巡拝者相手の宿泊施設提供は採算のとれる事業ではない。したがって都市部から離れた、不便な地にある仏蹟はみな公営となっている。これは三、四日後から体で感じ取らせられることなのだが、公営施設は貧弱、設備は不備で、サービスなどは期待できるものではない。それどころか、ドアのない便所、湯の出ないシャワー、やもりの匂う部屋（ガイドのヒロさんは、やもりが天井から顔の上に落ちれば強運が訪れるというが、落ちないことのほうが幸運だと思う）、蚊の襲撃ぐらいは覚悟しなくてならないのが現状である。

そうした情勢の中で、法華クラブが、全く採算を度外視して、莫大な資金を投入してホテルを建て、かつ経営していることは絶賛に価することであり、仏蹟参拝者にとってまことに有難く、日本語と日本料理で迎えてもらえることは正に砂漠のオアシスである。今後の健闘を祈っ

大菩提会本部にて

てやまない。

シャワーを浴びて午睡をとり、四時過ぎ日本山妙法寺を拝登し、藤井日達上人の偉業を偲ぶ。帰途、不幸な母親韋提希夫人が牢獄の窓から霊鷲山を望み見て釈尊に救いを求めたというその牢獄跡に立って霊鷲山を仰ぎ見た時、王舎城の悲劇として伝えられる観無量寿経の物語が急に現実味を帯びてくるのであった。

竹林精舎を建てたのは、韋提希夫人を后とした頻婆沙羅大王である。竹林精舎はその名のごとく竹林に囲まれた精舎で、静かな修行に適した場所であったことと思う。

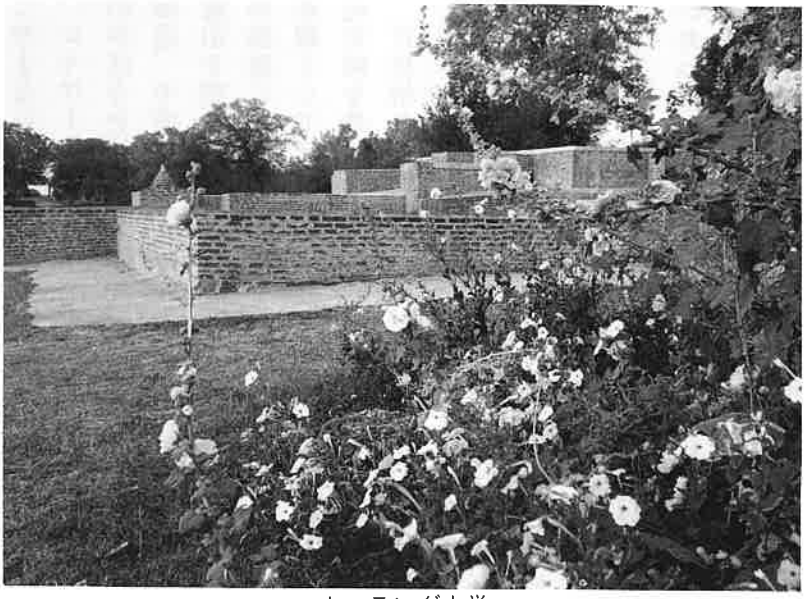
翌朝、霊鷲山での日の出を仰ぐべく五時ホテルの玄関前に出て空を仰ぐと、ひときわ輝く星があった。「あの星は？」とホテルの高島支配人にたずねると、「あれが明けの明星です」という。ああ、やはりあれがそうだったのか。あれが明けの明星かと思った時、ふと二五〇〇年の時の流れを超越して、つい四ヶ月前の十二月八日の明け方、釈尊が正覚を成ぜられたといった錯覚と親近感をおぼえた。そして霊鷲山では逆に、釈尊の御座所の前に正座して寿量品偈を誦して「常在霊鷲山」永遠の時の流れを感じた。

五

三月二十八日、霊鷲山をおりてホテルで朝食をとり、ブタガヤに向かう。七十六キロの行程である。割に順調に走り、お昼前ブタガヤのトラベル・ロッジに着いた。

ここではじめてインド料理に出会う。私は雑炊が好きなのだが、インド料理は雑炊の原点ではなかろうか。また私は南方の植物を見るとなんとなく懐しさを感ずるところからみて、私の祖先は南方系ではないのかと思ったりする。

さて、食べ物の話が出たついでだが、苦行林



ナーランダ大学

を出て尼蓮禅河に沐浴してたおれた釈尊に、スジャータ(純陀)という娘が供養したという乳糜とはどんなものなのか、インドに来たのでぜひ知りたいと思っていた。ヒロさんに聞くと、それはキールという、米を牛乳と砂糖で四、五時間も煮た乳粥だとのことだったが、ゆかりのこの地でデザート代りに出してくれた。甘くておいしいものだった。

スジャータに乳糜の供養を受ける前のことだが、釈尊は村の青年の歌を聞いて苦行と別れる決心をされた。

絃が強けりや強くて切れる
絃が弱けりや弱くて鳴らぬ
しめずゆるめず調子を合わせ
手ふり足ふりリズムに踊れ

この歌に出てくる絃楽器は何なのか。これもインドに来たついでに確めたい一つだったが、それがシタールという楽器であろうことがわ

かった。胴が南瓜でできているところからして相当古くからあったものと思われる。

それから、車で走っている時、道を歩きながら木の小枝を噛んでいる人が幾人かおった。歯みがきの原点をまのあたりに見て、やはりインドだなァと感じた。道元禅師は『正法眼蔵洗面の巻』に次のように述べている。

『華厳経』には「手に楊枝を取ったならば、自他共々に心に正法を得て、自然清浄ならん」と心に念じ、次に楊枝を使うに当たっては「自他共々に歯をみがき、煩悩をかみくだいて仏道を成ぜんことを」と祈念すべきであると、歯をみがくことは自分一個人の問題ではなく、公衆衛生であり、さらに進んでは仏道修行そのものである。

『摩訶僧祇律』には、楊枝の長さは短くて指四本、長くて指十六本、太さは小指の厚味大で、一端は太く一端は細く、太い端をこまかく噛むのであると書いてあり、また『三千威儀経』には「楊枝の先は三分以上かんではならない」とあり、「よくかんで、歯の上や裏をみがくようにとぎ洗うべきである。何度もとぎみがき、洗いすすぐべきである。口をすすぐことを何度もすれば清浄になる、と。

楊枝とは楊柳の枝のことだが、インド人が噛んでいるのは何の枝か。それはニームの樹の枝であった。私も五、六本小枝を折ってもらったが、彼らが無雑作に折ってくれたものはいずれも指十本ぐらいの長さだった。素人目に見たところでは楊柳とよく似ている。きっと楊枝と同じ成分の樹液を出すものではなかろうか。というのは、「洗面の巻」には、「毛を馬のたて髪のように植えた楊枝、つまり今日の歯ブラシ様のもので歯をみがくものがあるが、これは不浄な器具であり、仏法の道具ではない」と書いてある。これは一体どういうわけだろう。動物の毛を用

いたというだけではないだろう。歯ブラシを使っている現代人には抵抗のある言葉である。そこで歯学部のある鶴見大学の三輪学長にたずねたら、虫歯の原因はストレプトコッカス、ミュータンスとか、サングイスなどの菌が出すデキストランという粘着性の強い液が歯にべったり、しっかり粘着して、歯くそとでもいうべきプラーグの中で菌がウヨウヨ巣をつくり、砂糖を餌にして酸を出し、この酸が歯をむしばむのだそうで、楊枝をかむと、その樹液が酸を中和する。したがって、楊枝をかむことには物理的効果とともに薬学的効果があるが、これに反して、歯みがき薬剤のなかった当時であれば、ブラシで歯をみがくことは、こするという物理的効果しかなかったからであろうとのことだった。ついでにいま一つ。『三千威儀経』には、「舌をこするのには、まず第一に、三返を過ぎてはならぬ。第二に、舌の上部に血が出たらやめよ…」とある。私ども子供のころは、柄が竹製の歯ブラシがあって、柄の中程が薄くなっており、そこで舌をそいだものだが、なぜ舌をこするのか、それは味蕾（舌の粘膜内にある卵形の小体、感覚細胞から成り味覚を掌る）の上を掩うた前記の粘着性の強い液を除去して、味蕾の機能を発揮させるためのものだろうとのこと。

こうしてみると、古代インドの医学はまことにすばらしいものであり、それを身につけて、仏法にまで深化して説かれた釈尊は実に偉大なお方だと三嘆を禁じ得ない。

その釈尊が正覚を感ぜられたことを記念するブダガヤの大塔にいま詣でることができたのである。菩提樹があり金剛宝座がある。仏教徒にとって感激でなくて何であろう。

六

巌谷勝雄師が畢生の力を傾けた印度山日本寺を訪れる。霊鷲山に日本山妙法寺あり、ここに印度山日本寺あり、日本仏教ここに在りと誇り高きを覚えると共に、これらの寺院が今後真に釈尊の慈悲を現代に具現するには、インドの地に骨を埋むる覚悟の人材の輩出が望まれてならない。

この時にあたり佐々井秀嶺師に相逢うことができたことはまことに力強く有難いことだった。

このたびの渡印は仏蹟参拝に加えていま一つ大きな目的があった。それは冒頭に書いたように、海外留学僧のインドにおける受入先を確保することだった。

佐々井氏は、方丈さんと共に二十年前タイ国ワット・パクナムで修行した間柄であり、師はその後インドに渡り、インド民衆のよき指導者、救済者として刻苦精励、いまや民衆の絶大なる信頼を得ている人である。

彼については堀沢祖門師が『求道遍歴』に「ナグプールの仏教復興運動』の一章を設けて紹介している。二、三摘記すると、

〃ナグプールにおいても、佐々井上人は、ラジギールでそうであったように、獅子奮迅の精進をつづけた。自分自身の決意を新たにし、かつこんごの法道への祈願をこめて一週間の断食断水行をやったことも、ナグプールの仏教徒を感動させ、彼らを奮い立たせた。

日本人僧「スレイ・ササイ」の名は一躍ナグプールの全仏教徒に知れ渡ったのである。〃

〃やがて上人は仏教徒の強い要請に応えて、ナグプール市内の仏教徒の町につぎつぎと寺院を建立していった。かなりの規模のものもあればほんの申しわけ程度のものもあったが、何しろ財政的にゼロの状態から出発するのである。

私が三ヵ月の滞在中に直接協力した寺はパ

ンチシーラ寺院であったが、二人は毎日基金勧募のためにパンチシーラの人たちと街頭修行しながら戸別訪問をして募金した。

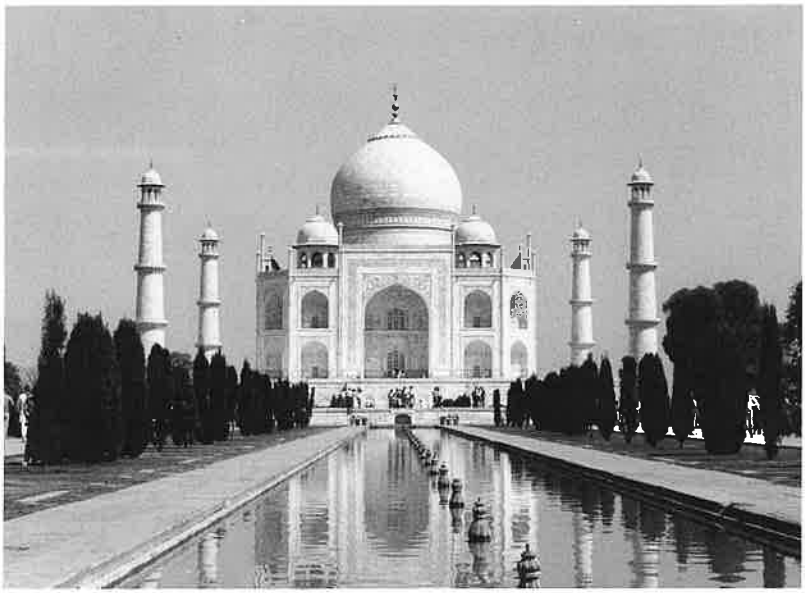
それだけでは充分ではなかったので、佐々井上人はあらゆる機会をつかんで基金をつくろうとした。たとえば、改宗式・結婚式・命名式あるいは講演会等の要請は何でも引き受けた。それらに出ればそれなりに五ルピー、十ルピーのお布施が期待できたからである。このようにして、少しづつセメントを購い、レンガを手に入れながら各町の寺々はゆっくりと、しかし着実にその数を増していったのである。〃

〃佐々井上人はサンガラトナ少年が法器であることを見抜き、かつまたインド仏教の復興はあくまでもインド人自身の手によらねばならぬことを予見して、サンガトラナを大乗仏教の国日本へ送りこむことを決意した。〃

右によって佐々井師の輪郭がおおよそ御理解いただけるかと思うが、私共が日本寺を訪れた時、前三日間ここで全インド比丘僧伽の会議があり、彼はそれに出席のため日本寺に滞在しており、私共の到着を待っていてくれた。

方丈さんが二十年ぶりの再会を喜び、「さっぱり日本に帰って来ないもんだから心配してたよ」というと、彼は「日本に帰ればインドに戻りたくなくなると思うから日本には帰れないんだ」という。その言葉を聞いた私は、すでにインド人になり切っている師の姿に思わず合掌した。

彼は、「インド留学僧は引受けるよ。私は全インド比丘僧伽を動かすことのできる立場にある。安心して任せてくれ」(佐々井氏は目下ブダガヤに建設されるインド僧根本道場建設委員長に任命されている)と力強く言ってくれた。留学僧のインド派遣に明るい見通しが立ったことは有難い仏縁だった。



タージ・マハール

このような人のあとを継ぐ人材をインドに送りたいものだ。さいわいは日本寺あり妙法寺あり、この寺を生かすのは人、人、人である、と泌々感じた。

七

三月二十九日、今日は二六五キロの強行軍である。涼しく、道路がすいているうちにできるだけ走破しようと四時起床、直ちに出発。八時間の旅である。

六時の日の出のころまでは涼しいがだんだん暑くなり、道路もこんでくる。クッションは悪いし、冷房車でないので開けた窓からほこりは容赦なく入ってくる。お互いしゃべるのもおっくうになり黙りこくってしまう。

インドの車にはほとんどサイドミラーがないし、テールランプもつかない。トラックなどは

うしろが見えないので、頼りになるのは警笛だけ。だからトラックのうしろには、どの車にもHorn Pleaseと大書してある。交通事故の時などはホーンを鳴らさないほうが負けだともいうから、とにかくやたらに警笛を鳴らす。その騒々しいこと、日本などでは到底想像も及ばないところである。

さいわい私は軍隊で通信をやったので、モールス信号を知っている。警笛がみな字に聞えるので退屈しなかった。モールス信号はご存知のとおり点と線の組み合わせで、三点の長さを一長音の長さにすれば字になる。運転手はモールス信号を知ってるのかしらんと思うくらい割に正確に文字を打ち出す。よく鳴らされたのは・—(ヘ)、・・(濁点)、・・・(ラ)、・・・・(ヌ)、—(ム)、——(ヨ)、———(レ)、————(コ)、・—(イ)、・・—(ウ)、・・・—(ク)、—・(タ)、—・・(ホ)、—・・・(ハ)、・——(ヤ)などで、たまには・———(ヲ)、・—・・(カ)なども鳴らされていた。これが組み合わされるとおもしろい。・——　・—〝やい！〟と鳴らしても相手がどけてくれないと————　・・・〝こら！〟と鳴らす。偶然にしてはでき過ぎていると思うかも知れないが、一度たしかにあった。また、・———　・—〝をい〟とか——　・—〝よい〟等々。

また、車のナンバーを見ているとこれまた退屈しなかった。・——　・—　・——　・—〝やい、やい〟と警笛を鳴らしてもいっこうに道をゆずろうとしない車がある。ナンバーを見ると、〝なるほどこれじゃ〟と思った。一八七八(嫌な奴)だった。恐ろしいスピードで迫ってくる大型トラック。あわや衝突かと思った途端に急停車した。〝ひどい奴だなァ〟と、ふとナンバーを見ると一五六四(人殺し)とあった。三六三二に会ったら間もなく七六七六がやって来た。〝弥勒

さんに南無南無〃か。そうかと思えば四一八三に出会い、宵闇か、宵闇迫まれば、と思って眼を皿のようにしていたら来た、来た。七八三八(悩みは)はてなしはとうとう見つからなかった。七九七四(泣くなよ)と慰めてくれる車もあれば、四六四九(よろしく)もあり、夕方なのに〇八四〇(おはよう)とやってくる車もある。

さて、ブダガヤで正覚を成ぜられた釈尊は、引続き一週間菩提樹下に坐し、やがて伝道を決意する。そこで托鉢しながら初転法輪のため足を運ばれた釈尊のスケールの大きさ、慈悲の宏大さは全くもって驚嘆のほかはない。

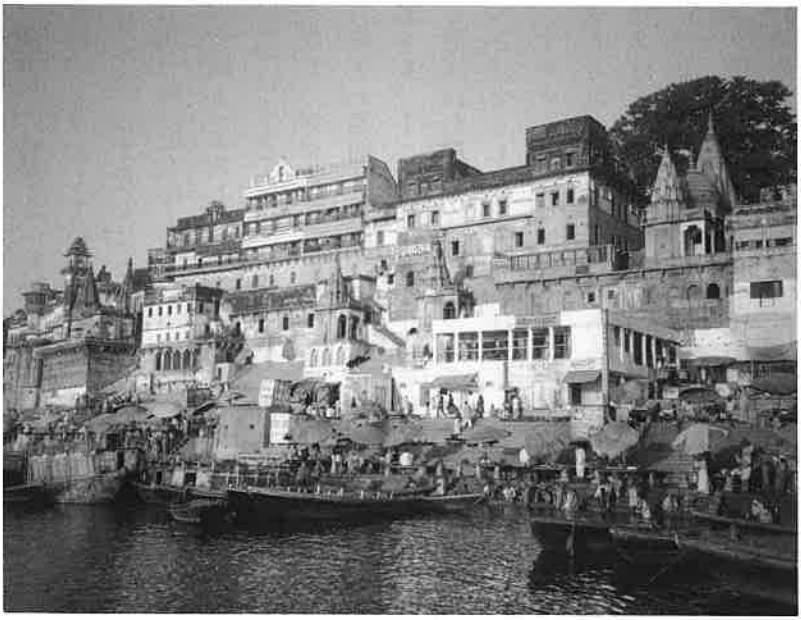
サルナートはヒンズー教徒の聖地ベナレスの東北方数キロのところにある。有名なダメーク塔は目下修理中だったが、緑の多い静かな、さすがは修行者の集まった聖地かと感じた。ダメーク塔の表面を飾る唐草模様を見て、ムーラガンダクティ寺院の金箔の初転法輪像と堂内三面に描かれた野生司香雷画伯の壁画釈尊伝を見て、そして博物館に足を運んだ。

途中、車はオイル・パンをいためたんじゃないかと思われるような衝撃を受けたが、どうにかベナレスのホテルにたどり着くことができた。さいわい運転手はベナレスの人だったので、私共が休んでる間に整備工場に行ってなおしたのだった。

八

三月三十日、五時に起きてガート(沐浴場)に向かい、小舟に乗って沐浴風景を見る。

ガンジス河はこの地でくの字形に曲りながら南から北東に流れている。街は西岸にあるので日の出を拝むことができる。ここに多くの沐浴場と旧藩王の館、その奥に尖った屋根の寺院などがある。沐浴場は水面下に連なる石段で、水位が大きく変化しても沐浴ができるようになっている。はじめ



ガンジス河畔

は王候や富豪が造ったものだそうだが、いまは広く一般の使用に開放されている。

鐘が鳴って読経が流れる中、遠近各地からやって来た人であろう、実に多くの人びとが沐浴している。そしてガートのわきにある火葬場からは煙があがっている。死体が川に投げこまれる。そういえば昨日、こちらに来る途中、前を走っていた車のトランクからコモに包んだ棒のようなものがはみ出していた。車の振動でそれが死体の足だとわかった時はいささか驚ろいたが、聖なる河ガンジスに運んでいるのだと知った時、インドの心にふれたような気がした。

この日もベナレス泊りなので午睡をして休養をとり、涼しくなってから街の見物に出かけたり、ヨガ、蛇使い、猿まわしなどの芸をホテルの中庭で見物したりした。

三月三十一日、今日は二七三キロの行程なので四時半に出発する。目的地は釈尊入滅の地クシナ

ガラ。割に順調にいって正午少々前トラベル・ロッジにつき昼食をとる。

ここにはビルマの仏教徒が建てたという総大理石の涅槃堂とコンクリート造りのストパがあり、そのまわりにはレンガ積みの精舎の遺構が往時をしのばせている。涅槃堂内には大涅槃像があり、香花が供えられており、参拝者を涅槃像を合掌してまわり、像の一部に手をあてはその手を自分の額にあてている。涅槃堂の近くには釈尊の遺骸を荼毘に付したラマバル塚がある。

五十三キロの道をゴラクプールに戻り、ここで一夜を明かす。

明日はいよいよ国境をこえてネパールに入るのかと思いながらホテルに入って階段に足をかけた時、ふと、戦時中、国境の町ポクラニチナヤ、綏紛河のポクラホテルの階段で、「五人の斥候兵」を書いた大久保中佐とばったり出会ったことを思い出した。四十数年前のホンのちょっとした出会いが記憶によみがえるとは、戦時中に養われた国境に対する特別の意識のなせるわざであろうか。

九

四月一日、四大仏蹟の最後の巡礼地ルンビニに詣でる。一二五キロだが途中国境をこえなくてはならない。出国・入国手続きは併せて一時間ぐらいのものか。ネパールに入ると人の顔付きが違ってくるのに気付く。と同時に空気も澄んでいるように感じた。

一九六七年四月、つまり今から二十年前、ビルマ出身の仏教信者であるウ・タント氏が国連の事務総長としてネパールを訪問した際、ルンビニの開発計画を国際計画として取上げるよう提案した。それによると、ルンビニに、参拝者

や旅行者のためのセンターをつくろう、それには地元ネパール国はもち論、世界の仏教国が協力してこの計画を成就せしめようではないかと要請した。この計画は国連の技術援助の一環として取上げられ、国際ルンビニ開発委員会が国連のネパール代表事務所に設置され、十三ヶ国がそのメンバーとなり、それと別に国家レベルのルンビニ開発委員会が、韓国、タイ、スリランカ及び日本に設置され、日本ではそれを助けるためネパール友好協会が結成された。

政治家であり、仏教信者であった元衆議院議長の故益谷秀次氏がこの事業の重要性を提唱され、この事業についてのパイオニアの役目を果たした。そして、益谷氏亡きあとルンビニ開発委員会の委員長を引受けたのは衆議院議長故船田中氏であった。

昭和五十二年、ネパールの高僧アニルーダ師がルンビニ計画促進のため来日された。その際、ルンビニ開発委員会とネパール大使館が共催してアニルーダ師歓迎の昼食会を尾崎記念館で開いた。私は故岩本禅師の代理として出席する機会を得、その時、旧知の間柄である佐藤忠雄氏（当時氏は参議院決算委員会調査室長だった）に会い、ルンビニ開発計画について詳しく知らされ、また、益谷氏亡きあと、氏の秘書であった東一（はじめ）氏を紹介された。東氏は益谷氏の意を体し、ネパール大使館と連絡をとりながら、幾度かルンビニを訪れ、施設改善に地道な努力を続けられたのだが、その後の進展状況を伺うと、ネパール国は国柄が違うだけに、日本人のわれわれが事を運ぶのとは違って、なかなか思うにまかせず、いささかいらだち気味だといっていた。

国連のルンビニ復興計画書はとっくに完成承認されており、それによると、巡礼者や旅行者のために適切な設備を完備し、博物館、図書館、

研究所、集会所、各国僧院まで完備したものであり、それらがアショカ王の石柱を中心としたルンビニ・センターとなっており、総工費五千万ドル。そのうち約半分の土地買収、道路、水道、水路施設は地元ネパールが負担し、あとは各国からの寄進に頼るもので、とくに経済大国日本に期待するところが大であるという。(佐藤忠雄氏の話)

この壮大な聖地建設計画は一九八五年を目指しているというのだが、現にルンビニに足を運んでみると、計画は何一つ実行に移されていない。まことに寂寥の感を禁じ得なかった。にも拘らわずルンビニの隣りにはりっぱなネパールの寺院が屹立しており、ルンビニをへいげいしているがごときである。仏教大国日本の奮起を切望してやまない。

参拝終えてバルランプールまで二二五キロを移動するのだが、途中で後輪パンク。スペヤを入れ替えたら、これまた空気圧が低くて走れそうもない。のろのろ走って二キロほどしたら修理屋があったので助かった。このトラブルで二時間を空費したが、さいわい丁度お昼時だった

ブッダガヤの大塔にて

のでこの間に昼食をとった。
バルランプールのマヤ・トラボテルはかつて王侯の邸宅だったとかで、建物と庭だけはりっぱなものだった。

十

四月三日、サヘト、マヘトへ向かう。サヘトには「祇園精舎の鐘の声、諸行無常のひびきあり……」で日本人の誰しもが仏教的感慨を抱く祇園精舎跡があり、その近くに日本国祇園精舎の鐘の会の造立になる祇園精舎の鐘がある。
さすがはスダッタ長者が、「黄金を敷きつめても売らない」という祇陀太子の土地を買い取って釈尊に寄進しただけあって、祇園精舎跡はまことにすばらしいところである。
ここ祇園精舎は王舎城からの距離直線距離で五百キロある。釈尊は四十五年の教化活動の間、祇園精舎には六回、王舎城には二十二回安居しているという。炎天下八〇〇キロの道を六回も往還するとは全く起人的という以外には言葉がない。
大塔や僧院など壮大なレンガ積みの基壇が残っているが、ここから東方数百メートルのマヘトには舎衛城の跡がある。
ここからラクノーまで一六五キロを走破し、ラクノーから飛行機でニューデリーに着いたのは夜の十時半過ぎだった。
四月三日、朝五時出発、ジャムナー河沿いに二三〇キロほど下ったところにあるアグラに向かう。さすがは首都ニューデリーの近辺だけに道路はよく整備されており、ここには日本製の車もチラホラ見える。私共が乗ったのもトヨタのマークIIで、冷房が入って乗り心地もよく、乗り心地だけは日本に帰ったようだった。
タージ・マハールは二十二年の歳月を費して

造った世界最大の大理石建造物だけに、まことにとほうもないもので、インドに来たほとんどの人が訪れるところであり、あまりにも有名なので何も書く必要はないかと思う。

帰途、マトウーラに立寄り、博物館で仏教美術のすぐれた作品に接した。ここの仏像群は、ガンダーラの仏像がギリシヤ彫刻の影響を受けて端正なのに対して、ふくよかな丸味を持ったインド風なものとして知られている。

翌四月四日、市内見物、ご承知のようにこの街はニューデリーとオールドデリーの二つから成る。ニューデリーはインドにしてインドにあらずといわれるくらい西欧的に整備された街であり、ここにはほとんどといってもいいほど牛の姿を見ない。

牛はヒンズー教徒にとっては神聖な動物であり、その数は人間二人に一頭といわれるほどだから億単位の数であろう。農村ならともかくも、近代都市のどまん中に牛がのこのこ歩きまわる。これは、あらゆるものが雑然と混在して生きているインド社会ならではのことである。しかしこれでは街の近代的整備ははかれない。ニューデリーは牛を隔離したのであろう。とにかくニューデリーはインド的でない面を多く持つ都市である。

夕方空港に入ったが、飛行機の数の少ないこと、発着の便数の少ないこと、これが一国の首都の空港かとわが目を疑がうほどだった。

午后六時三十分のフライト。翌五日、一時間おくれて十一時成田に着いた。

長い旅だったが、仏天の加護により三人共元気一杯に終始し得たことは、何よりのしあわせだった。

帰国してまだ十日も経ってない。思いつくままに書きなぐった未完稿であることをご了承願いたい。

インド留学記

その2

学問の町プーナ

東方学院講師
駒沢大学講師
阿部　慈園

一

プーナは、実はイギリスの命名で、本来のインド名は、プネーといいます。しかし、一般には「プネー」より「プーナ」のほうが通りがよいので、ここでは便宜的にこの町をプーナと呼ぶことにします。

現在プーナ市の人口は約一三〇万を数えます。郊外の人口を併せますと、一五〇万ともいわれます。四月、五月の炎暑期（日本の夏に相当）は、とても熱く、摂氏四二度を経験したことがあります。それでもインドの人たちは、ここを避暑地の一つと見ています。海抜は六〇〇メートルほどで、むしあついボンベイから汽車で上ってきますと、車窓からのひんやりとした涼風がほほをなでます。飛行機は、朝夕二便がボンベイ・プーナ間を飛んでいて、所用時間は三〇分あまりです。

このプーナの町は、かつてマラータの英雄シヴァージーを生んだペシュワ王朝が栄えた町です。四方を小高い山に囲まれ、古都としての落

ちついたたたずまいを見せています。その風格と気品は、わが国の京都や奈良の町をほうふつとさせます。四年半の留学生活を送ったわたくしにとって、このプーナの町は第二のふるさととともいうべく、なつかしくそしてあたたかい町になりつつあります。

二

この町は、デカン高原における農産物および果実の集散地の一つでもあります。菜食主義者（ヴェジタリアン）の多いこの町は、野菜が豊富でかつ安価です。菜食主義はバラモン階層の人たちに多く、その食習慣は一般の人びとに強く影響を及ぼしています。一説によれば、肉食より菜食のほうが、家計費が三分の一ですむから、ともいわれています。ヴェジタリアンたちは、重要なタンパク源を主として牛乳（水牛のミルクが主）と多種の豆類とから摂っているようです。

果物も多く、安価で美味です。熱い夏の贈り物マンゴーは、三月の末ころからあらわれはじめます。パプースという名のマンゴーが特においしい。パパイヤやジャック・フルーツも楽しめます。小さめのモンキー・バナナや赤バナナも、輸入物とは一味ちがいます。ココナッツの青くさい味は、今となってはとてもなつかしい。みかん類は、甘ずっぱいサントラー（日本のみかんの味にやや近い）とさくさくしたモーサンビーの二種があります。ラーマの実（ラーマ・プル）、シーターの実（シーター・プル）もわが国には見られない珍果。後者は、あけびに似た味がします。

三

プーナは、また軍事都市としての側面ももっています。ここにはインド南部軍および空軍の司令部があります。また国防大学も存します。インディラ・ガンディー首相を暗殺したのはシ

ク数徒の近衛兵ですが、ここでも体格がよく、ひげもじゃで、ターバンを頭に巻いたシクの軍人をよく見かけます。治安がよく整い、十二時すぎの夜間外出にもほとんど不安がないのも、この町の特長といえましょう。

最近、この町は工業都市としての一面も兼ね備えてきました。ボンベイへの道路ぞいに大きな工場が建ちはじめ、いわば「ボンベイ・プーナ工業地帯」ができつつあります。わが国との提携会社も一、二を越え、日本からの技術指導員が時おりおとずれています。プーナの若ものたちは、大学卒業後、報酬のよいエンジニアや公認会計士をめざすものが多くなってきました。

四

このように、プーナはさまざまな顔をもつ町ですが、伝統的には「学問の町」と呼ばれるべきでしょう。といいますのは、この町にはバラモン階層が多く、教育のとても熱心な町だからです。したがって、学問研究、特にサンスクリット（梵語）学の盛んなところでもあります。

市内には、多くのカレッジ（単科大学）や研究所があり、それを兼併統合してプーナ大学が存在します。一九七四年の報告によりますと、一一五のカレッジと一四の研究所を数えます。そのうち、サンスクリット学の四大研究機関として、㈠プーナ大学サンスクリット科、㈡デッカン・カレッジ、㈢バンダル研究所、㈣ヴェーダ研究所が挙げられます。わたくしは、㈠に所属し、㈡に時おり通い、㈢のゲストハウスに止住して博士論文をまとめました。

プーナ大学は、特に文法学・ヴェーダ学が盛んで、最近では論理学を学ぶ学生も増えています。戦後欧米やわが国からも多くの研究者・学徒がここに学び、現在でも常時数人の日本人留学生が、真剣にインド学・仏教学を修めています。

（つづく）

インド留学記

その2

インドで仏に会う

東方研究会研究嘱託

保坂　俊司

しょぱなから荒っぽい歓迎をうけて当惑しきりの私は「こんな筈では無かったのに」と途方にくれた。しかし取りあえず住むところを定めねばならず、生来の楽天家である私は気を取りなをして、宿捜しを始めることにした。

しばらく安ホテルに居て大学の寮に入る為の運動をしたが、どうにも取り会ってくれない寮長に、随分落胆させられた。そして自分の期待に答えてくれ無い彼への、恨みが自分の心のなかで大きくなっていくのを感じた。住む所は一月以上も定まらず、摂氏45度から50度湿度90パーセント以上の中を毎日寮長に陳情に通ったが、その道すがらインドへの不満がじょじょにではあるが、心の中に湧き上がってくるのを感じた。勿論、大学が悪いのでもインド政府が悪いのでもなんでもない。ただ自分の思いどうりにならない現実に「自分の期待に答えてくれない寮長はひどい人」等の自分勝手な不満を感じただけなのである。しかし、私はその時こそ感情で全てを判断してしまう自分勝手な不満をつのらせ

ていた。人間貧すれば鈍すとは良く云ったものである。このとき私は多くの留学生が直面する被害妄想的な、異常心理状態に陥ってしまっていた。戦前中国から日本に来た留学生が、国に帰ってから反日闘争の指導者として激しい抵抗をしたと聞くが、彼らの心理がその時痛い程わかった。以前の自分ならば「忘恩の徒けしからん」等と安易に考えていたが、しかし現に自分が困難に直面してみると、そんな呑気なことは云っていられない。知る人もないインドで、フラストレーションは高まり、インドへの不満は日々にたかまった。其の時私は留学生の陥り易い、こうした不満と焦燥に常に脅かされていた。冷静になって考えれば、この寮長は悪い人ではないのである。勿論インド政府が悪いなんてことは、全く論外のことである。しかし、其の時は自分の心のなかにインドに対して、複雑な感情が渦巻いて、反印感情が頭をもちあげてきていた。

しかし、そんなある日、私は仏の様な人にめぐりあった。風貌はちょうど奈良薬師寺の薬師仏そのものの穏やかさ、まさに大人の風格ある韓国人留学生金龍換さんである。彼は日本に留学し立派な成果を挙げ「更にインドで釈尊の心に触れるために」と、わざわざ留学してきた仏教学者であった。金さんは私の苦境をみて「良かったら暫く同居しましょう」と云ってくださり、私は本当にうれしかった。まさに地獄で仏に会うとはこう云う事であろうと実感した。もっとも金さんもゲストハウス住まいであったから、長くは居候をきめこむことは出来なかった。しかし、すっかり金さんに出会って気分を良くした私は「多少の強引さはやむをえない」と判断し、強硬手段で大学の寮の一室を確保することにした。其の時には、早くもインドへ来てからほぼ二月が経過していた。私は今度は恩返

しとばかり金さんが部屋を確保するまで共同生活をすることにした。ようやく落ち着いた生活が始まった。

インド人としての第一歩

衣食足りて礼節を知るの言葉どうり、生活基盤が定まるととたんに本来ののんびり屋の性格を取り戻すことができた。今まで本当に辛いと思って通った焼けつく道も、インドに住む実感を与えてくれる尊い物の様に感じられるのだから、我ながらあきれてしまった。現金なものである。しかし、私は此の時の体験から、外国人留学生の苦悩や不満がいかに切実なものであるかを感じ、帰国してからは留学生のお世話をしたいと思ったものである。残念ながらその後実行というほどのことは何もしていないが、今もその気持ちはかわっていない。

留学生として殆どなんの後ろだても無く、未知の世界に飛び込むことはそれなりに勇気も意思も必要である。しかし最も大切なことはその国の文化や伝統に自分を合わせられるだけの柔軟性とそれらを的確に認識する予備知識を持つことであろう。さもないと些細な行き違いから決定的な誤解が生じることとなる。この種の寛容さが無いと常に相手と衝突し、楽しいはずの生活がその為に大なしになってしまうことになる。またいつまでも自分の生活を変えずインドに来てまでも、日本の生活を維持しようなどという人もいたが、これも程度問題で行き過ぎると留学の意味が半減してしまう。そこで私は極力インド人学生になりきろうと決心し、彼らと同じような生活をしてみることにした。それは私がシーク教と云う現実のインドに生きている宗教をテーマとしていたから、考えついたことなのであろう。私にとっては文献を繙くこと以上に、インド人の生活や風俗に親しむことに興味の対象があったのである。

禅と衣食住(3)

手巾

東　隆真
（駒沢女子短期大学学監　教授）

手巾

家人に、「手巾ということばを知っているか」とたずねたところ、「知らない」ということでした。

そこで、『広辞苑』（岩波書店刊）を開いてみました。

「手巾」という項をまとめてみますと、

(1)てぬぐい、てふき、ハンカチ

(2)僧侶の語で、うなぎのこと

(3)手巾帯のこと。僧侶が用いる長さ五尺ばかりの手巾のような腰帯。

右のようです。

昨今、手巾ということば、そしてその意味など、ほとんど知られなくなっているのではないでしょうか。

しかし、禅宗では、手巾ということばは、今も用いられています。

洗面、入浴のときなどに顔や手を拭いたり、ころもの袖をからげるときに使う布のことです。

これに、個人用のものと、公界（僧堂、浴室、

後賀などの公共）用のものと二通りあります。

一幅で、長さが一丈二尺、その色は白色以外の色となっています。だいたい、白色の衣類は、インドでは在家人が着て、出家僧は着ないことになっています。白衣舎とは、だから在家人の家を指します。日本の坊さんは、ころもの下に、白衣を着たりして、だいぶ様子が変ってきています。

手巾のことは、『梵網経』とか『大比丘三千威儀経』などというお経にちゃんと出ていますから、インドから中国へ、そして日本に伝わってきているわけです。

わが国では、とくに鎌倉時代から、禅宗で用いられて来たのですが、今はほとんど見なくなりました。

これは、さきの『広辞苑』の(1)に相当するでしょう。

なお、手巾のことを浄巾ともいうとする説がありますが、これは少し乱暴な解釈です。

浄巾は、飯台や食卓を拭く布、食事をするとき、お袈裟やころもがよごれないように膝をおおう布のことです。

また、行脚の道中などで、大小便を行う場合、必らずお袈裟やころもを脱がなければなりませんが、脱いだものをつつむための布も浄巾とよんでいます。

大きさは、一巾、二尺ばかりの長さ。生地は木綿です。

次に、これは禅僧に多いのですが、曹洞宗の場合ころもや改良服を着るとき、腰の上部に、黒色、茶色、紫色などの絹を編んでつくった環状の紐を二重、三重にまいていますが、あれを手巾といいます。

臨済宗や黄檗宗の僧は、黒色の太い丸い手巾を二重巻きにして、正面は飾り結びというか組み紐のようにしています。

青く剃りあがった頭、たくしあげた麻のころも、素足に下駄をはいて、手に網手笠をもっている雲水さんを、京都や鎌倉の街かどで見かけることがあります。よく見ると、腰のあたりに、手巾をしめています。

この手巾は、『広辞苑』でいえば(3)になるでしょう。

江戸時代のことですが、このごろの僧は、腰に帯を巻いて手巾と名づけて風流をきどっているとなげいている書物もあります。

なるほど、手巾は、一種の坊さんのおしゃれなのかも知れません。しかし、私などに言わせれば、ころもをだらりと着て手布をしめていない坊さんのすがたは、なんとなくしまりがないように見えてしまいます。きりっとひきしまった禅坊主の風格を感じとることができません。

それに、手巾は、風流やおしゃれというばかりではなく、けわしい山を登り、海や川をわたるとき、ころもをたくしあげたり、あるいは作務（労働）のとき、袖をおさえる襷の役目もしますから、かなり実用性があるのです。

いま、手巾といえば、禅僧（とくに曹洞宗の僧）のあいだでは、この腰紐のことを頭にうかべることになります。

帽子

もうすと発音します。禅宗以外でも、もうすとよんでいる場合があるようです。中国の古い音が、いまもそのまま使われているのです。もうすは、もちろん頭にかぶる帽子のことです。

坊さんが外出するとき、改良服を着て茶人帽や不老帽をかぶります。

茶人帽というのは、お茶人や俳句の宗匠などがかぶる帽子のかたちに似ています。ふつう利休帽ともよんでいます。利休居士や芭蕉の肖像

画をみて気のついたお方もあるでしょう。

不老帽というのは、一種の頭巾です。大黒さんの帽子に似ているので大黒帽ともいいます。中国の洛陽、白馬寺を訪れたとき、白馬寺の坊さんが、たしか不老帽をかぶっていたと記憶しています。日本山妙法寺のお坊さんも、たぶん白色や黄色の不老帽をかぶっているようです。

それから、お寺で正式の儀礼を催したり、檀信徒の仏事供養を行うときに、主役の僧、たとえば住職や導師などが帽子をかぶって登場します。

この場合の帽子は、いろいろの種類があります。それは、いわば坊さんの地位、役職によってことなるのです。先端が烏帽子のようにとがっている長い帽子を、立帽子といいます。それから、六陵形の六角帽、アフリカ駐在のフランス兵の帽子に似ている鼓山帽子などです。

ところで、曹洞宗の坊さんが、絹布などでつくった白色のえりまきを首にかけていることがあります。これは護衿といいます。

しかし、この白いマフラーのようなものが他宗においては帽子の一種なのです。天台宗、真言宗、日蓮宗では帽子、浄土真宗では帽子ないし半帽子、浄土宗では領帽などとよんでいます。

帽子のことは、『四分律』というお経に出ています。

お釈迦さまがベイシャリーにいらっしゃったとき、ひとりの修行僧が帽子をかぶってやってきました。

そして、帽子の着用を認めてほしいとうったえました。

しかし、お釈迦さまは、修行僧は帽子をかぶってはならない、帽子をかぶるのは在家人の作法であるとお許しになりませんでした。

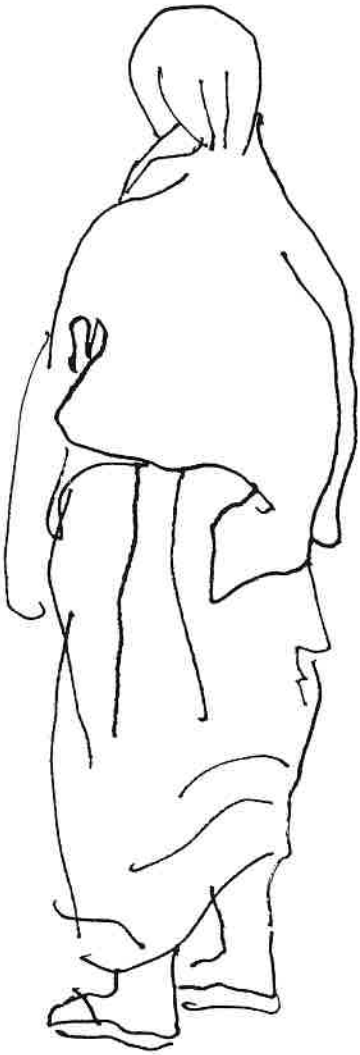
ところが、その後、お弟子たちが頭が冷えて痛いというので、着帽を認められました。(細

くてやわらかい鳥の毛)、結貝で頭をつつみ帽子をつくるようにとおっしゃった――。

西城では帽子を脱ぐのが礼儀とされているようです。

たとえば『大比丘三千威儀経』には、まず部屋に入るときは、あらかじめ弾指(だんし)(指をはじく。いまのドアをノックすることにあたる)し、入ったら帽子を脱ぎ、次に挨拶をする。次に指示された場所にすわる。次にみだりにお経を持って入室してはならないなどとあります。

江戸時代のことですが、日本の臨済宗では帽子をかぶる時期はお寺によってちがいました。南禅寺は十月五日、相国寺は九月九日、大徳寺は九月九日、九月二十一日、十月一日、十月四



日、妙心寺は十月一日、十月四日というように、お寺によって時期がことなっていたばかりではなく、その立場や地位によっても同じではなかったようです。

いま、曹洞宗では、帽子は防寒のためというよりも、装飾のために盛んに使われていると言ってよいかも知れません。

私は、学生時代に師匠のお寺に帰って、大本山総持寺祖院の朝課（朝のおつとめ）に随喜しました。

十二日、一月の厳寒、北陸能登の早朝はほんとうに寒い。祖院の大祖堂の堂内は冷えきって、まるで冷蔵庫のなかにいるみたいです。しかし、そんなときでも、誰も帽子などかぶって朝課をつとめる坊さんはおりませんでした。

大本山総持寺のご開山螢山禅師が制定された『螢山和尚清規』を見ますと、十月一日、炉を開き、「頭帽を許すべし」とあります。してみると、総持寺や永光寺（能登）、大乗寺（加賀）など螢山禅師のお寺では、螢山禅師のころ、十月一日から帽子をかぶることをみんなに対して認めていたことがわかります。そして、三月一日、炉を閉じ、「頭帽を脱ぐ」とあります。

しかし、正月一、二、三日の祝聖修正の法要のときは、主人（住職）も大衆（住職以外の僧）も「頭帽を著せず」とありますから、このときばかりはどんなに寒くても帽子をかぶってはいけないのです。

以上、禅宗（曹洞宗）を中心にして帽子のことを申しあげました。

前号で、杜多に、うっかりずだとふり仮名をつけましたが、とだの誤りです。訂正します。

21世紀の扉

赤間　義徳

二十一世紀の扉はまだ閉ざされている
扉には言葉が刻みこまれている
「二十一世紀はふたたび精神の時代となるであろう。
もしそうでなければ　それは存在しないであろう」
黒田大圓方丈様が
みなぎる信念の拳(こぶし)で
扉をたたく

精神の扉はついに開かれるだろう
海外留学僧たちは　東西の十字街頭から
釈尊へ至る新鮮な道を　説き始めるだろう
われらも　あとにつづこうではないか
心を合わせて
二十一世紀を支える
佛教精神の大黒柱を
ここ　成寿山「善光寺」に
すっくと　建てようではないか。

「二十一世紀はふたたび精神の時代となるであろう。もしそうでなければ、それは存在しないであろう」。

右は、フランス人で国際的に行動した作家アンドレ・マルローの言葉です。

これを理解するには、自分の身のまわりだけでなく視線を地球全体に向けてみる世界的視野が必要である。たとえば中近東でなにかがおこり石油がこなくなったら日本はどうなるだろうか。先ごろのオイルショックを思いだせば、日本だけではこの地球に生きていけないことが分るでしょう。

戦後四十年、地球のどこかで戦争がおこり今も続いていることも忘れてはならないでしょう。戦争の火種はあちこちにくすぶっており「世界破滅時計」は破滅の三分前をさしているのです。科学・技術はモノ中心に進歩し、精神の世界はおきざりにされた。一例をあげると、実の親が保険金欲しさにわが子を殺す事件が報道されても、それほどショックをうけなくなってきています。日本はモノがあふれて心が貧しい時代になっています。水爆は地球を何回も破壊するほどあります。もっとすごい殺人兵器も考案しています。もし「精神の時代」とならなければ地球は破滅し二十一世紀は存在しない、とマルローは予言し警告しているのです。

自分の身のまわりが平和だからとタカをくくっているととり返しのつかないことになります。先祖からうけついだ地球を子孫に渡せなくなる。どうしたらいいか、われわれひとり一人は無力だ。しかしあきらめてはいけない。海外留学僧派遣に少しでも手を貸すことで、二十一世紀の地球存続の大事業に参加できるからです。

二十一世紀は目前に迫っている。今すぐに心を耕す人材を多く育て世界に派遣しなくてはならない。世界的視野をもつ海外留学僧派遣は、

自分から遠い問題ではないのです。地球が存続しなくては先祖も子孫もありませんよ。日米や日欧の経済戦争もモノでいったら片づかない。心でいけば必ず道は開ける。家庭でもふたたび心の時代にならなくては崩壊します。モノがいけないのではない。それを使う心によってモノが生きるのです。進歩した科学・技術を生命を救う医療に使うか、殺人兵器に役立てるかは、心の問題です。

私ごとで恐縮ですが、あきかんに毎日三十円以上入れています。自分のための貯金ではなく海外留学僧派遣のためですから、そのたびに合掌します。毎日ということが大切で、合掌をするたびに心は「善光寺」につながり二十一世紀を「精神の時代」とするための大事業にもつながります。誰にでも無理なくできます。今すぐにはじめてみようではありませんか。

●論文●

21世紀の仏教と私の役割

岩波　弘道
駒沢大学仏教学部卒業
曹洞宗教化研修生

二五〇〇年前、釈尊によってインドに誕生した仏教が、中国を経て日本に伝えられ今日に至っていることは警嘆に価することです。なぜならこの間に、兵乱や天災地変などが数え切れないほど発生しています。この間にあって、財宝以上に、これを珍重し護持して来た先人の並々ならぬ努力があったからこそ、今私達は仏の教に相値うことができるのだと思います。私は「修証義」第五章の「今の見仏聞法は、仏祖面々の行持より来れる慈恩なり、仏祖若し単伝せずば、如何にしてか今日に至らん、一句の恩尚報謝すべし、一法の恩尚報謝すべし、いわんや正法眼蔵無上大法の大恩、これを報謝せざらんや」の一節を読む時、いつもおもいを新にするものです。

さて、人間はいろ〳〵の面で有限ですが、その有限性が強く意識されて、大きな苦悩の原因ともなっており、更にそれが宗教的要求の源泉となっているものと思います。つまり生命の有

限性とか、善を行なう力の有限性で、前者は、無常観を、後者は、罪悪観を呼びおこし、そこから二つの代表的な型の宗教、すなわち無常観からは、解脱教、罪悪観からは、救済教が生れるといわれています。そして解脱教の代表は仏教であり、救済教の代表は、キリスト教といわれ、仏教内に限っていえば解脱教の代表は禅、救済教の代表は念仏ということができましょう。

釈尊はじめ、祖師方の伝記をひもとくと「修証義」の冒頭に「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」とあるように、その多くが無常観から出発しています。

生来聡明にして内向的な太子シッダルタに、深く人生を考えさせまいとして、父王スッドーダナはいろ〳〵と心をくだかれた。シッダルタの心をなるべく外に向けさせようとして試みたはずの四門出遊が、逆にシッダルタの眼を人生の四苦に見開かせ、出家の決意を固めさせることになったのは、父王にとってまこと皮肉な結果でした。それにしても生老病死の四苦を、はじめて目撃した太子ゴータマの驚きと不安はいかばかりだったでしょう。

この四門出遊がもとで太子シッダルタは最愛の妻子を捨てゝ一介の乞食沙門として出家するのですが、考えてみますと、太子が出家された当初には、一切衆生を救うというまでの心の動きはなかったのではないでしょうか。

ただ〳〵自らの解脱を求めての、真にせっぱつまっての出家ではなかったかと思います。

だからといって、太子の出家が決して低いレベルの動機からであったとはいえません。「維摩経」の「衆生病むを以っての故に、われ病む」の有名な一語が教えるように、自己の苦悩は即ち一切衆生の苦悩であります。生老病死はこの互に生を受けたものゝ等しく直面する重大問題です。したがって「生を明らめ死を明らむるは、

仏家一大事の因縁」なのです。

ところで今日、仏教に対する一般の見方は、一口に葬式仏教といわれるように、葬儀や法事だけが仏教であり、お寺は死者だけを相手にしていると考えられ勝ちです。現に私自身、寺院に生まれ育って仏教的雰囲気に慣れていたため改めて「仏教とは何か」と問い直すことなく過してきました。もとより私は葬儀や法事を軽視するものではありません。今日的仏教儀礼の大切なことは良くわかるつもりですがそれだけでは一面的な見方といわざるを得ません。同時に或はそれ以上に仏教本来の姿に迫る努力が必要だと思うのです。

現在アメリカの宗門寺院の在り方は大きく二分されると聞いております。一つは日本からの移民に伴なって、移民の方々が護持してきた寺院、これは日本寺院の海外出張所といったものです。日本移民がまだアメリカ社会にとけこめないころ、彼等のサロン的役割を果たしたもので、多分に日本寺院の色彩が濃厚であると聞きます。もう一つは、直接禅に結びついた日系以外の米国人によって護持されている寺院、こゝでは中国の叢林を思わせるような共同生活によって、僧堂の行持を如法に行持していると聞きます。そして既に両本山に拝登して瑞世の式を了えている者もあり、今や禅は、アメリカ人自身によって語られ、導かれいよ〳〵定着の時代を迎えようとしているといいます。

仏教がアメリカという風土に根づくという歴史的なといっても過言ではない時に、私はその清新にして活性化されたアメリカにおける仏教に学びたい強い欲求を覚えます。彼等と起居を共にし共に悩み精迫することは大きな意義のあることと信じます。

私はこの度自分の僧侶としての覚悟を再確認させて頂いた思いです。

今既に心の時代といわれ、二十一世紀は心への志向が更に強化される時代であろうといわれます。目前に迫った二十一世紀にどう対処するか、余りに遠大なテーマですが仏教が人々にとってより身近かなものとなり、生活に生かされる、そうした形になるために、いさゝかでも私のアメリカでの体験が生かされれば幸だと考えます。

未来社会の仏教と私

浦田　智司

千葉商科大学商経学部商学科卒、仏教 大学文学部仏教学科卒、日本大学歯学部附属歯科技工専門学校卒

政治的には東西といい、経済的には南北などといわれるように、世界の国々は、大小・強弱・貧富・体制等、それぞれ異なった状態のもとにある。そして自然環境はもとより、社会・経済・文化などの面で困難な条件できびしい生活を強いられている国も少なくない。

これに反して日本は、経済大国として物質的

にはきわめて恵まれた豊かな状態にある。これは、戦後、有利に展開した国際情勢のもと、日本人の努力勤勉によってもたらされたものではあるが、物質的繁栄のみを追求した結果、今となって心の貧しさを思い知らされる羽目に陥入っている。ここから真の幸福とは何か、人間の生き甲斐とは何かということが自らに問われることとなり、宗教、なかんずく仏教に対する関心が高まっている。

また、日本の平均寿命は急速に伸びており、いまや高齢化社会に突入しはじめている。間もなく日本社会は、老人人口と、それを扶養する人口とのアンバランスの問題が生じてくるであろう。が、今日の日本人の心の程度をもってしては、果して高齢化社会を支え得るであろうか。

他を省みるゆとりのない、自意識過剰の若者もやがては老人になる。ここに必要なのは老若立場を換えて人間の幸福を考えてみる柔軟性である。他を思う心、利他をさきとする心がなくてどうして潤いのある未来社会を建設し得るであろう。今こそ精神的世界の豊かさを志向する社会・人間の心の豊かさを求めてゆく社会の建設に大きく眼を見開くべきときである。

さいわいにして日本は仏教国であるが、現代日本の若者の眼に、仏教は果してどのように映じているであろう。彼らが連想するものは、恐らくは「葬式」であり「法事」であり、または「迷信」「非科学的なもの」であろう。

しかし真の仏教は、本来きわめて科学的・革新的なものである。その意味においては、西欧の先進的な若者たちが持っている仏教のイメージが、本来的な仏教のすがたに近いのではなかろうか。近年、禅仏教が西欧の若者に求められているのもそこに一つの原因があるのではなかろうか。

私ども日本人は、東洋の文化遺産を軽視し、

西欧追随型の文化に押され過ぎているのではなかろうか。そこで、東西文化の融合を目指した仏教の可能性を開拓することは、次代を担う私たちに課せられた重要な課題である。

いま、諸外国の精神的基盤に溶け込み、異文化に接して、日本仏教を外から見直すことは、これまでに見えなかった仏教の新しい側面を知るうえにきわめて有効なことではなかろうか。

私たちは現代社会においては、学歴や勤務先といった鎧をまとって生きている。しかし海外に出れば、自分は自分でしかなくなる。そして発想や価値観を異にする人たちと出会うことにより、日本では望み得ない貴重な経験を積み重ねることができるであろう。

日本民族学の父・柳田国男先生は、伊良湖岬に流れついた椰子の実を見て、遥かな熱帯国と日本との深い関係に気付かれたという。その意味で、タイ国と日本の文化は黒潮によって深くかかわりあってきたといえるであろう。また、『日本書紀』にみる「吐火羅」との交流や朱印貿易における経済、文化などの日本との結びつきなどもある。しかし、これからは必ずしもタイ国と日本に望ましい形で発展してきたとはいえない。

今日、日本人のタイ国に対する歴史や文化に対する知識はきわめて表面的なものにとどまっていると思われる。おそらく私も、今回の応募を知らなければ、タイ国のことをどれだけ知ろうとしていたであろう。

一冊の本が人の岐路を決定づけることがある。必然や偶然といろいろな状況が考えられる。さまざまな機会を自己啓発と結び付け、そして経験の中から得るものを大切に心の糧として成長したい。

グラビアで見たタイの人びとの瞳の輝きに、飽食の日本で私どもが忘れかけている心の清浄

を感じ、欲望と執着にふりまわされている私の心の穢れを洗い清めてくれるような気がして、私は仏教国タイに強い憧れを抱き、この応募を契機に、タイ国文化、別して仏教を謙虚に学び、今後の日本国との仏教交流に微力を捧げたいと思う。

21世紀の仏教と私の役割

島崎　義孝

花園大学文学部社会福祉学科卒、東北大学文学部社会学科博士課程卒、花園大学文学部社会福祉学科非常勤講師

〈仏教東漸〉ということがいわれてほぼ一世紀になる。今日ではそれぞれの社会ですでに一定の価値を認められ、むしろ仏教に対する期待はいよいよ高まっているかにみえる。だが、こうした事態はいったい何に起因するのであろうか。

仏教に対する態度はヨーロッパとアメリカと

ではいくぶん異なるように思われるが、ここではいわゆる近代社会の典型と見做されているアメリカのそれについて若干述べてみたい。

一九六〇年代は知られているように、アメリカで様々な混乱が頻発した時代であった。従来の諸価値、たとえば政治・経済・教育・家族あるいは教会の正統性までもが批判の対象にされたといわれている。それはひとくちにいえば、伝統的なアメリカ社会の存立そのものが疑問に付されたことを示しているが、とりわけ若い世代によって異議申したてが行われたことは注目に注する。

周知のごとくアメリカは二世紀余り以前、自由、平等あるいは成功、富といった近代社会がめざす諸価値をもっとも実現しやすい国家として出発した。そのばあい相反する二つの観念が混在していたといえる。ひとつは植民地として出発したアメリカが、旧大陸に対する対抗理念としてもっていた〈ニュー・エルサレム〉という宗教的観念である。それは絶対主義の抑圧と紐帯を免れて、自己の全人的な解放を新天地に求める運動として現れた。少なくとも政治的には、国家としての規範的統一を保持していくうえで、聖書的イメージを中核とする普遍的な神の象徴性は大きな力を発揮してきたし、社会秩序一般もある程度このような観念とパラレルな関係を保ちつつ発展してきたといえる。それに対してもうひとつは、〈アメリカン・ドリーム〉ということばによって示されるように、専ら社会的成功と富裕を目標とするきわめて現実的な欲望の追求を公然と行う風潮である。アメリカ史はこの二つの観念の相克によった貫かれてきたと考えられているが、事実は後者が前者を圧倒するほとんど一方的な展開をみせた。たとえば建国の理念としての自由や平等は、この社会が世俗化の過程を加速度的にたどるに

したがって、解釈に大きな変容をきたした。もともと他者を視野に入れて語られてきた自由や平等が、自己の利益（セルフインタレスト）を優先させる意味の方に重点を移動させたのである。

〈近代社会〉を特徴づけるいくつかのターム、官僚制、機械化、合理性、巨大化、匿名化などからわれわれが受けるのはいったい何であろうか。ふつう社会で発展とか進歩、成功というばあい、その現実が示す両価性を不問にしがちである。さしあたって都合のいい方をわれわれは選択する。しかし、負の部分がいよいよ目をおおうようになってはじめてあわて出すのである。しかもそれはわれわれが考える以上に深刻な事態に立ち至っているかもしれない。たとえば公害や悪性の政治闘争などにみられるように、われわれの存在そのものにかかわる生態学体系の破壊、自己を他者を結ぶ感受性豊かな人格の内面的生活の荒廃などを生じさせることがある。それは自然からの人間の疎外、人間からの人間の疎外としてたち現われる。六〇年代に沸騰した混乱や運動を評価する視点は様々であるが、それは近代社会の先頭を走るランナーとしてのアメリカが他の諸社会に先がけて、早晩そうした社会も必ず遭遇するであろう事態をもっともはやく体験したとはいえないだろうか。アメリカはいろいろな意味で、近代諸社会の帰着すべき状態を示すひとつの実験台としての役割を担っていることはまちがいない。

アメリカについて述べるまでもなく、民主的過程に対応できない人間に権力が委ねられ、家族や隣人関係が稀薄化し、道徳倫理が浸食され、かつまた良き伝統が発展的に継承されがたい社会、そのいくぶんかをわれわれはすでに体験している。しかも今日の社会は合理性や機能性ばかりではなく、快適性（アスニティ）までも獲徳の対象としているけれども、それらは決して確固とした基盤

があってもたらされるわけではなく、むしろわれわれが何らかのみかえりを提供することによって、かろうじて維持されているにすぎない。くりかえして言えば通常われわれは右のような現実を知らないか、故意に見るのを避けているのだ。だが、合理性や機能性の増大はがんらい人間に耐えがたい性格のものであるにちがいない。だいいち人間そのものが不合理な存在であり、われわれは機能性や論理性とは根本的に相入れない錯綜した世界を生きているのである。合理性や機能性がめざすものは不分明な部分を削除し、目標にむかって構成要素を組織的に配列する点にある。したがってそこでは、過性の快適さや満足は得られたとしても、全人的な幸福感は得られない。象徴的な言い方をするならば、精神的身体（どうじに身体的精神）であるべき人間存在が、身体と精神とに分裂し、それぞれ部分的に環境への適応を余儀なくされているのである。アメリカにみられたいわゆるネオ・オリエンタリズムは、一面においてはそうした不安感を克服し、精神と身体との一体化をとり戻すことにあったといえるのではあるまいか。

ネオ・オリエンタリズムは多様であり、それに対する批判もないではない。曰く、道徳廃棄的、無政府主義的傾向、シニカルな私人主義、排他的、内向的集団。しかしながらこれらいわば反社会的な志向を示す運動とはやや趣を異にして、日常生活の身近かな事柄から見直していこうとする動きもある。自由討議運動から共同生活体にいたるまでの市民運動、公民権運動などがそれである。そして仏教に対するアプローチの仕方も右のような状況を反映して一様ではない。瞑想によって非日常的な霊力を得る、芸術活動のひとつの起爆剤として仏道修行を行う、キリスト教とは異質の世界観・人生観を得るといったように各人各様の関心と期待が寄せられ

ているのである、彼らの仏教に対するかかわりのなかには、必ずして仏教の精神に合致しないものもあるといわれているが、それはそれとしてアメリカ社会が宗教的には主としてキリスト教によって色どられていることに注意すれば、仏教が何ほどか対抗的な意味あいで取り組まれていることが知られよう。つまり、キリスト教およびそれに影響された政治・経済思想が結果した社会の、ある種の閉塞状況を突破する方法が仏教に求められているとはいえないだろうか。仏教は人間観においてキリスト教とは対照的な展開を示しているが、それは救済方法にも如実に反映されている。具体的な実践方法としての坐禅・瞑想はその典型的な現れであろう。言うまでもなく仏教の教える瞑想は無上正覚に至ることを目ざしているが、意味するものは自己が他者の介在を許さず、自己に直接出会うことにある。キリスト教の世界観が自然科学上の様々な発見によって切り崩され、科学主義のもとに近代的理性をそなえた人間にとって、非合理的なるがゆえに我信ずといった心情がしだいに不可能になりつつある今日、仏教のもっとも根本的な実践方法はそうした時代の傾向に適合的な内容をもっているといえよう。静寂のうちに自己を探究する行為じたいに、個体としての人間が普遍的なものに直接通じていることをわれわれは知るのであるが、それは同時に人間存在の虚構性に気づくことでもある。個体や霊魂の恒常性については無我論が、また、人間が神の創造になるものでないことは縁起論が、それぞれ仏教の中核的な教説として初期から説かれている。そしてこのような認識論的な立場に立つならば、現代社会のひとつの特質としてしばしば指摘される人間相互の疎外的状況を回復するための端結を仏教に見出すことも不可能ではないであろう。

以上のように見てくると仏教が負うべき課題は大きく、かつ重いことがわかる。にもかかわらず、今日の日本の仏教が大勢において祖先祭祀を中心とする儀礼主義に陥っており、そこから一歩も抜け出ようとしないのはいったいどうしたことであろうか。生の人間の切実な要請に答えることが仏教の根本的な成立契機であったし、今後もそうあり続けなければならない。釈尊においては、日常生活に生かされない知識や思想は徹底して退けられてきたはずである。釈尊の教えに接しているわれわれ自身が、その精神をほんとうに理解し、実践しているのかどうか。仏教者の日常の行履を視野の外におき、現実のわが国の仏教事情を閑卵して、いたずらに〈仏教東漸〉を云々するのは考え直さなければならないであろう。仏教とはいったい何であるかを再確認する意味において、彼地で行われている清新な仏教受入の態度に見るべき何かがあるとすれば、それこそわれわれがもう一度学ぶべき点であるといえる。

汝自身を知れ、とは千古不易の箴言だが、このことばが今ほど切実な意味をおびている時代はおそらくあるまい。というのも、今日のわれわれをとりまく生活のどの局面においても、凝似環境の環境化とでもいうべき事態がいよいよ進行しており、自己の所在を見出し難い状況が急速に顕在化しつつあるからである。かつてD・フィリップスは（禅）仏教が志向する人間観を、いたるところに中心があって周辺のない円と述べたことがあるが、右のような状況にあって、彼のいうような自己認識がいっそう不可欠であることは言をまたない。そして、われわれの立場からするならば、坐禅・瞑想という心身を具したきわめて実践的な行為によってこそ、はじめてそうした認識への可能性が開かれるのであり、したがって自らも行じ、他者にも普く

坐禅瞑想を勧める意義が在するのではあるまいかといえるのである。

良寛さんに魅せられて

（愛心と愛話の花籠に盛られた美しい心）

李　幼麟
復旦大学常勤講師、上海科学技術大学常勤講師

あと十三年、人類は二十一世紀を迎える。人間はさまざまで、思想はまちまちであるが、いかにわれわれを二十一世紀へ導き、二十一世紀を歩んでいくか、時々考えざるを得ない。

一年間、指導教授飯田先生のご指導で、様々な方面から良寛さんに触れてきた。その結果、良寛さんの多方面にわたるその才能に頭をさげる。私はもっと良寛さんを研究し、中国の国民にいまだにまだ知られていない良寛さんを紹介しようと決心した。

国が違い、風俗習慣が違うけれども、良寛さんの思想は決して日本のものだけでなく、中国のものも含まれている。というのは、良寛さんの思想ははるかに日本の国境を越え、東洋的である。良寛さんの徳望は、良寛さんが示寂して百五十年たったが、ますます高揚され、日本はおろか諸外国の人々にも敬仰されてきた。

一年前まで私は良寛さんが只管打坐を旨として生きぬいた禅者であったことすら知らない。まったく良寛さんの真実、真面目を知らないで、多くの人々とあたかも群盲が象の一部分を撫でて、あれこれと象の全体を論じ合うようなものがあった。

良寛さんは自分の実態をあらわにしないように、愚のごとく、魯のごとく生きていた。後世の人たちが如何に自分を解しようとも、それは人にまかせ、その辞世にもあるように「裏を見せ、表を見せて散る紅葉」で、どう自分を見てくれようが、自分の真面目には変りがないと平然として暮らされた。良寛さんは、故意にその真面目をぼかしていたわけではなかった。堂々とした長篇の漢詩、しかもその詩の体は、中国、日本文学史上いまだかつてなかった新しい形態で、自分の真意を切々と語り、そして、訴えている。

飯田利行先生の御著書「良寛詩集訳」「良寛髑髏詩集訳」「大愚良寛の風光」などに良寛さんに関する、いろいろな問題と謎を解明してくださっている。

看荘子圖賛骸骨

荘子の図を看(み)て骸骨(がいこつ)に賛す

垂天雲鵬出
九萬里圖南
縮翼髑髏筆
掛在半間菴

註　垂天の雲に　鵬出づ
九万里　南せんことを図り
翼を髑髏(どくろ)の筆に縮め
掛けて半間の菴(いおり)にあり

この詩は、その題のしめすように、荘子逍遥篇の内容に対して、良寛さんの批評を述べたものである。良寛さんの心情というものをよく描いたものであるということができよう。

この詩の通釈を述べるならば、「大鵬が垂天から出てくる。九万里を南に行こうとする。私のどくろは翼を筆に縮める。半間の菴の中に掛けられているが、ゆったりとしている。はたしてどちらが自由でゆったりしているか。」というようなことになろう。

たしかに、荘子逍遥篇に登場する大鵬は巨大なスケールの持ち主であり、九万里もの気が遠くなるような距離を一回はばたきするうちに飛んでしまうのである。とてつもないスケールの大きさである。だが、それは本当に自由ということなのかと良寛さんは考え、自分のどくろは翼を筆の中に縮め、半間の菴の中でもゆったりとしていると主張している。それは全くその通りであろうと思われる。とかく我々は、荘子の大鵬を見る時、大空をわがものと飛ぶのを見る時、彼はなんて自由に大空を飛びまわっているのかと考えがちである。だが、それは大きなあやまちではないかと今は、考える。大鵬はその大きさの故に巨大な空間がなくては自由は得られないのである。しかし、良寛さんの描く髑髏は筆の先にその身を縮めることもできるし、たった半間の菴の中にあっても大鵬と同様の、いやそれ以上の自由を得ることができるのである。

我々人間というものは、とかく、外へ外へと目を向けがちである。しかし、それは本当の自由を得るということにはならないのではないだろうか。大きいものを見ればきりがない。だが、それら巨大なものが自由を得るためには、それ以上に巨大な空間が必要なのだということである。それとは反対に、内へ目を向けるならば、そこに存在するものはほんのわずかな空間で自由を得ることができるのである。たとえば、私たちの心の中にだって自由は存在するのである。私たちの体は本当に小さなものである。そこにある私たちの心というものは方寸ほどもない。ほんのちっぽけなものである。だが、私たちはそこにおいて、思いをめぐらし、無限の宇宙をとびまわることでもできるではないか。九万里をひととびする大鵬以上の自由をそんなわずかな空間で感じることができるではないか。決して大きいというのが、自由ということではない。

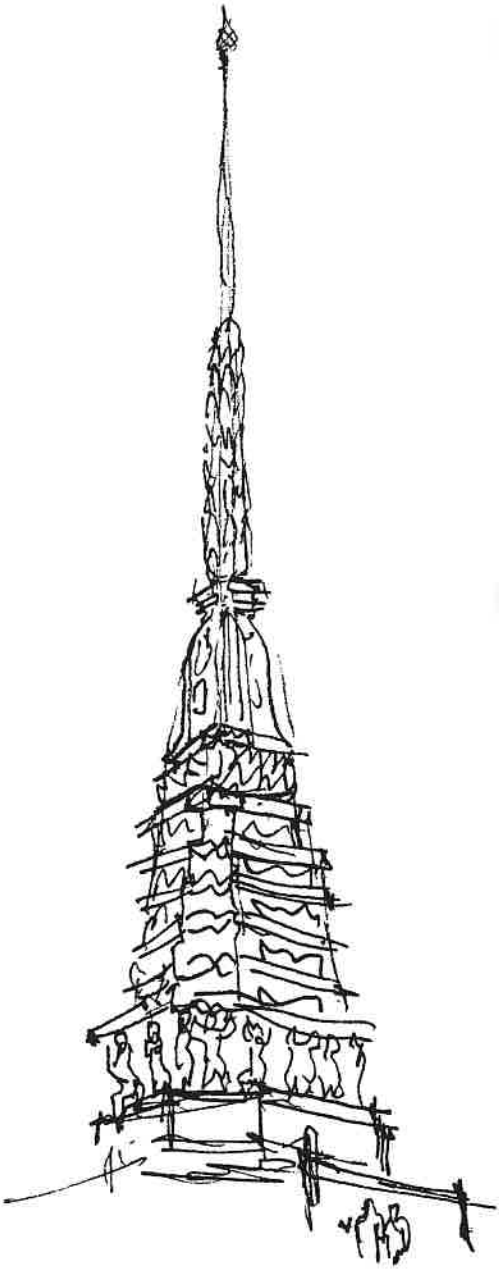
筆先にだって、私たちの心の中にだって自由はあるのである。それを自由と感じることができるか否かはそれを感じる人次第である。

私はこの詩を読むとどうしようもない思いにかられる。それはこういった大いなる思いを私たちに語りかけてくれ、私たちの心の奥底に眠れる無限の自由をよびさますからであろう。

魂を奪われる良寛さんの詩は実に多い。どれ一つにも秘められた真実がある。それらを探りあてようと努力したい。

良寛さんの生き方、風光は二十一世紀を開くにたる指標として世界の注目を集めている。良寛さんの示した道こそ二十一世紀の道である。良寛さんの風光は二十一世紀を照らすしるべとなるであろう。

良寛さんを中国人に紹介するのは私の使命のように感じている。愛心と愛語による花籠に盛られた最も美しい心のこもった詩歌の世界は分かりにくい世界である。その世界を少しでも究明できればなによりである。



アメリカ・禅・センター報告

前角老師とその門下

曹洞宗　河内　義宣

(1)

前回、ニューヨーク州マウント・トレンパーにある道真寺から禅の状況を報告いたしましたが、私はその直後、道真寺を離れ、マンハッタンにほど近い禅真寺に移り、四ヶ月の滞在の後、今既にロスアンゼルス禅センター（仏真寺・ZCLA）に移っております。

禅真寺の状況については後述いたしますがこの禅真寺のメンバーの一人、ヘレン女史はアメリカ人で日本人から嗣法した五人の禅者について執筆中であります。嗣法ということは私共曹洞宗の僧侶にとってたいへん重要なことであり、すべての寺院住職は嗣法（法を受け嗣ぐこと）を受けているわけですが、こちらでは嗣法を受けた人は法の相続者(Dharma Successor)として、師の印可を受けた人、あるいは、それ相当の人に限られていて非常な尊敬を受けています。

さて、その五人というのは鈴木[注①]俊龍老師からベーカー師、鈴木包一師からクオング師であり、

中川宗淵老師からマウリーン師であり山田耕雲老師からエイチケン師であり、前角老師からグラスマン師でありますが、嗣法者はこの五人にとどまらず[2]、実に前角老師の嗣法者だけでも既に五人いて、更に遅かれ早かれ嗣法を許されると思われる人達が何人もいます。

さて前角老師を紹介いたしますと、老師は大山博雄とも孤雲（軒）とも称されておりますが、前の曹洞宗審事院院長とかさまざまな要職を歴任された黒田白純師（栃木県、光真寺）の三男として一九三一年に生まれられ、師父の法を嗣がれるとともに臨済宗の宇坂光龍老師と曹洞宗の安谷白雲老師（原田祖岳老師の法嗣）からも印可を受けられ、一九五六年渡米、一九六八年にＺＣＬＡ（仏真寺）を開創され、国籍もアメリカ人国籍をとられて、アメリカ人教化、禅の普及に全力を傾注されている方であります。そして、その間二十年、嗣法のお弟子（日本語で先生と呼ばれている）五人とそれに準ずる人達が各地に散らばって坐禅の普及につとめ今日の状況になっているわけです。機関紙『TEN DIRECTION』に掲載されているそれらの支部はカリフォルニア・マサチューセッツ、ニュージャージー、ニューヨーク、オレゴン、ユタ、ヴァーモントなどに十六ヶ所、ヨーロッパに四ヶ所（アムステルダム一、イギリス三）メキシコに一ヶ所あります。私がいた道真寺、禅真寺もその一つでありますが更に認定されていない坐禅グループも相当あると思われます。

私はニューヨーク滞在最後の夜、メンバーの一女性が指導している坐禅会に案内されましたが、そこでは十名程のクエーカー教徒の人達が教会に集まって坐っておりましたし、道真寺のダイドー先生はニューヨーク州の刑務所の中に「ロータス・フラワー禅堂」を持って指導にあたっておられます[3]。またＺＣＬＡにテキサスの

田舎からやってきた青年の話しでは、そこではまだほとんどザゼンは知られていないので、奥さんともう一人のメンバーの三人で五年間程坐禅を続けている。私達はテキサスの開拓者だなどと話しておりましたが、とにかく、こうして坐禅は確実にその輪を広げております。しかし文化、伝統、価値観、常識すべてが異なっている中で、さまざまな問題を含んでいることは言を待ちません。そうしたことから毎年一度、それらの先生達はＺＣＬＡに集まり老師を囲んで、いかに正法を伝えてゆくか話し合いが持たれています。その会をホワイト・プラム・アサンガ（白梅会）と言っており、私は幸いにオブザーバーとして参加することを得ましたが、ＺＣＬＡを本山として各地に禅が根を下してゆく様子はきわめて興味深く新鮮なバイタリティと燃えるような弘法の熱気を感ぜずにはおれませんでした。

前角大山
- グ④ グラスマンテッゲン……ピーターマチスン
- ゲ⑤ ゲンポー マーズル
- ジョーユウ ベック
- チ⑥ チョーゼンベイズ
- ダ⑦ ダイドーローリー
- ⑧ ……シシン ウイック
- ……テッシン アンダーソン
- ……ジツドウ アンチェタ

注１　鈴木師は静岡県焼津市林叟院の住職でサンフランシスコに渡り禅の普及につとめられた。タサハラ禅堂、グリーンガルチ農場は非常に有名である。師の『zen mind Bigginer's mind』はアメリカで禅を志ざす人達の必読書のようになっており、重要な存在となっている。包一師は法嗣で現林叟院住職である。

２　アメリカ禅センター名簿を見ると約百五十のセンターが掲載されており、韓国系の三十の他に臨済宗佐々木老師のグループ、曹洞宗片

桐老師のグループ、カップロー師のグループが大きな勢力となっている。カップロー師は原田祖岳師、安谷老師、安谷老師、中川老師に参禅された人で、師の『The three Pillars of zen』はアメリカの禅の普及に大きな影響を与えたものと思われる。

3　大道師は『Ten Direction』にロータス・フラワー禅堂を開くまでの経過と、いかに刑務所の囚人達が「人生とは何か」「自由とは何か」きわめて真摯な問題をかかえて真剣に坐禅にとりくんでいることを報告している。そして更に、私達は皆、自我という檻（おり）の中に閉じこめられた囚人のようなものであり、この自我の檻をうち破らねば、即ち、無我ということを本当に知らなければ真の自由は得られないことを説いている。

4　前角老師の一番弟子であり『Ph.D(Doctor of Philosophy』の学位を持つ数学者であり、今はベーカリ禅堂の堂頭できわめてユニークな活動を行っている。（次章参）

ピーターマチソン師（無量）は現在アメリカで最も著名な作家の一人であり、臨済宗の嶋野老師、前角老師に学び、今テツゲン先生のもとで学んでおり、間もなくテツゲン先生の最初の嗣法者になると考えられる。

5　ゲンポー師はオランダ・アムステルダムにセンターを持ち、更にポーランド、ドイツなどに行って次から次へと接心を行って勢力的に活動している。

6　チョーゼン師は女医であり、オレゴンで活躍している。因（ちなみ）に、この国ではほとんどの坊さんは何らかの職業を持っており、ＺＣＬＡも五十名程の滞在者（多い時は七、八十名）がいるが日中はそれぞれの職業に従事している。

⑦シシン師はPh・Ｄの学位を持つ物理学者であり次に老師から嗣法を受けると思われている。

⑧テッシン師は現在メキシコ、ゼン、センターの主幹で、十五年程前に新潟県大栄寺に安居したことがある。

(2)

禅真寺（ZEN Community of NEW YORK とも Greyston Seminary とも云っている）について述べますと、ここはテツゲン先生の道場で約二十名の滞在者が共同生活をしながら修行しておりますが、他に約百五十名程の会員の人達がいます。そしてその生計の為にベーカリーを経営していることと、その経営、労働そのものを作務（ワークプラクティス）としてとらえ実践していることに最も大きな特長があります。中国の禅宗史において八世紀に百丈懐海禅師が労働を叢林の生活の中にとり入れたことは、それ以前の歴史からみると全く破天荒なできごとであったように、今テツゲン師は仏法は生活の中に実践されてこそ本当に意味があるということから作務、労働を非常に重視されて単なる自給自足、あるいは生計のために働くのでなく、労働そのもののなかに仏としての自己を実現するべく指導をされています。従って「作務とは何か」[1]ということが常に問われています。

私が滞在していた四ヶ月間は十一月の感謝祭十二月のクリスマス、年末年始ということでベーカリーの最も多忙な時で、特にクリスマス前後はメンバーの中からこれでは戦争地帯だなどという悲鳴とも思える声が出たりしましたが、これがベーカリー禅堂の臘八接心である、菩薩の誓願は尽きることのない闘いのようなものである。修行者は安きを求めてはならないということでそれを乗り切ることができました。

そうして年末の仕事が終りますと元旦から十日間セミナー（研修会）が五、六十名の参加を得て「発菩提心」をテーマに開かれました。申

しあげるまでもなく、道元禅師が『学道用心集』に示された第一は「菩提心を発すべきこと」というのでありますが、菩提心とは何か、慈悲とは何か、小[2]乗仏教、キリスト教、ユダヤ教、大乗仏教、道元禅師の立場から、それぞれの講師が招かれて講議があり、ディスカッションが極めて自由に行われていかにもアメリカ的な研修会でありました。もちろん坐禅と読経も併修されたことは言うまでもありません。

さて、次に私が興味深く感じたことは、メンバーは『甘[3]露門』に示された「五如来賓号招請陀羅尼」に基いて五つのグループに分けられ、その中の一つにソーシャル、アクション、グループというのがあります。主に滞在者以外の人が中心になって行っておりますが毎月一度ホームレス（家のない）の人達のために施食が行われており、用意された二百五十人分程の食事は韋駄尊天の前におかれ、甘露門が読誦されて所定の場所に運ばれてゆきます。そして更に今、それらの人たちのための収容施設と授産所（仕事を教える）を始める企画が市当局やキリスト教の人達を協力して進められつつあることであります。これらの事が「菩提心を発すべきこと」あるいは「仏の慈悲行」の実践として行われていることは申しあげるまでもありません。

そして更に興味深かったことは『英[4]訳甘露門』の読誦が、私の席をおいたその時から始まったことでした。それ以前は日本と同じように読誦していたのですが、英語とダラニをミックスして読誦するのですが、なかなか声がそろはない、儀式としてどこか不自然である、そのようなことから何回も読誦の仕方がかえられ、私の滞在の最後には「発菩提心陀羅尼」「授菩薩三摩耶戒陀羅尼」の所で笛が鳴らされ、最後の「普回向」の所はジューイッシの歌が斉唱されるということになって、一応形がととのったようです。

しかし、まだ修正される可能性があります。日本では既に完成した儀式法要、あるいは講式などがありますが、始めはおそらくこの如くであったに違いないと感じたことでありました。又同時に時代や状況に応じて新しい形の儀式法要が考えられてしかるべきであるとも感じたことでありました。

以上、わずか四ヶ月間の見聞したことをまとめてみましたが、セミナーの後、ベーカリー禅堂は平日のスケジュールにもどり、朝昼晩の坐禅と読経、ベーカリーでの作務ということになりますが、一月は注文の少ない時でもあり、首座を含む数人は毎日八時間の坐禅が課せられるということであります。

註

①セミナリーの講師的存在であるルー・ミッネン師は哲学者であり、『テン・ディレクション』に「作務とは何か」という論文を寄せている。

②メンバーの人達は必らずしも皆仏教徒であるわけでなく、カトリックであったり、プロテスタントであったり、ユダヤ教徒であったりします。従ってそれぞれの宗教を尊重しながら仏法の理解を深めてゆくという姿勢がここにあるわけです。

③『甘露門』は江戸期、檀家制度が定着してゆく過程で、面山師によって編纂されたもので、曹洞宗の施餓鬼法要の中心をなすものである。

④甘露門について、明治期に大内青巒居士は漢音で読む所や唐音で読む所や日本語の所やダラニの所があって不自然であると批判していますが、英訳されることによって英語とダラニの二つになったわけでよくなったというべきか、『英訳』の紹介と、テツゲン先生のきわめてユニークな受用の仕方について次回にまとめてみる予定です。

開創十八年目の開山忌

新寺建立から十八年目を迎えて、二月七日午後二時から、善光寺で開山忌が厳修された。

株式会社ナリス化粧品の社長、故・村岡満義氏を開基に、師父の白純大和尚を開山として迎えて、昭和四十四年に法人認可。四十五年に本殿、客殿を建立。四十七年に、本殿と客殿を増築して晋山式を挙行。さらに五十七年には釈迦殿の落慶を見る。

開山法要が厳粛に行われたあと、挨拶に立った本寺の大田原・光真寺のご住職、黒田俊雄師は、「先住（開山・黒田白純大和尚）の亡くなった朝は、雪が降り、雨になった。密葬の逮夜（たいや）は大風が吹いた。これは、八風吹けども動ぜずという、不動心が大事だということを教えて頂いたと思う。七回忌にもかつてない程雪が降った。

先住は、開山忌をことのほか大事にされたが、今日、法要に参列して先住のその心をしみじみと思った。坊さんとして生まれた有り難さを身体で表わすと、このような法要になると思い、開山忌の意味もそこにあると感じる」と語られた。

当山住職は、「寺をやっていくには、本日参列いただいた方々のお力添えをいただかねばならない。本当に有り難うございました」と、感涙と共に謝辞を述べた。

長男・武徳君、二男・泰志君に続いて、昨年二月八日に得度した三男・博志君を抱き抱えるようにして参列者の前に立った姿が印象的だった。

励ます

横浜国立大学では、世界各国から教育研修留学生を受け入れているが、現在、同大学では、二十人が研修を受けている。

善光寺住職自らも、タイ・アメリカで修行した経験を持ち、海外に留学僧を派遣している今こそ、異国で生活する留学生を励まし、今後の留学僧派遣にも、具体的な参考意見を聞かせていただこうという意図で、二月十四日、善光寺で親睦会が聞かれた。

文部省が国費で受け入れている留学生は、年

研修生を

間三千人を越し、うち、現職教員と教育機関の職員を対象とした教育研修留学生の数は百二十余人を数える。昭和五十五年度から実施されており、留学生は、教育学部を持つ国立大学にそれぞれ分かれて、一年半のプログラムで、日本語や教育学などを学ぶ。

主に、発展途上国の初・中等部の教員が対象とされ、帰国ののち、それぞれの国の教育水準向上に貢献させようという目的である。

留学生の世話役をしておられる菊地英昭氏は、国立教育研究所の職員であると同時に、曹洞宗の住職でもあられ、当山の住職とも知己であられることから、日本の仏教寺院の見学の意味も含めて、留学生を連れて善光寺参拝が実現した。

住職は、「留学生の為に是非とも激励したい。」と、心温まる有意義な一夜を想い出として贈るべく、このひとときを持った。

当日は、善光寺海外留学僧派遣育英会の佐藤

俊明常務理事、同会参与の阿部慈園師、同じく曹洞宗ボランティア会会長松永然道師、高野山真言宗の歓成院住職摩尼和夫師、日蓮宗の相模原師、法性寺住職佐藤功岳師ら、海外交流や仏青活動の経験者も招いて、更に有意義な親睦をはかることとした。

横浜国大の奥田真丈教授と共に善光寺を訪れた十一人の留学生は、釈迦殿での「仏教興隆・世界平和・学事弁道精進・道中安全・心願成就」などを祈願する法要に参列、日本の仏教儀式を興味深く見守りながら合掌した。このあと、一階大広間で懇談会を持ったが、住職は、「遠い国からはるばるおいでになり、異国生活で不自由をしておられると思う。私も、タイで僧院生活をして、言葉では大変不自由をしたから、みなさんの気持がよくわかる。」と語り、これからは毎年こうした留学生の激励と親睦の集いを継続していく考えをのべた。

出席した留学生は、フィリピン・ビルマ・ブラジル・タイ・メキシコ・マレーシアなど多彩な国々で、幼稚園教育、教育管理、教育行政、テレビ教育、文部省公務員などの仕事に携わっており、それぞれが精一杯の日本語で自己紹介をした。

「ささやかながら日本の味を楽しく味わってもらおう。」と、檀家の料理屋さんに場所を移して留学生をもてなした。

それぞれが自国の歌を歌い、最後には肩を組み合って大合唱となった。

「楽しかった。」「最高の夜だった。」「黒田和尚は素晴しいキャラクターの持ち主だ。」と、留学生たちは名残り惜しそうに宿舎に帰っていった。

この記事は、中外日報でも大きく取り上げられている。

ニューヨーク・ゼン マウンテン一行参拝

四月七日、成田に到着したニューヨーク・ゼンマウンテンの一行十一名が、来日して第一番目に訪れたのは善光寺であった。

今回の来日は、一行を率いるローリー大道師（黒田方丈の兄弟子前角老師の徒弟）の端世（両大本山での一夜住職の儀式）が主な目的であるが、帰国予定の二十日まで、鎌倉・永平寺・高野山・岡山と、各地の見聞や桐ヶ谷寺の晋山式への出席など、過密なスケジュールが組まれている。

ニューヨークのゼン・マウンテンは、前角老師のお弟子大角老師ローリ

ー大道師が住持しており、当山から派遣された留学僧・河内義宜師もここで学んでいた。そしてすでに今年度の留学僧の受け入れも決定した。

一行のうち九名は外国人であるが、釈迦殿で厳修された法要では、法式にのっとり両班や堂行（どうあん）などの役割りを立派に勤め上げた。

般若心経をよどみなく読誦する彼らには、異国人としての隔りはない。

法要のあと挨拶に立った黒田方丈は、留学僧に対するゼン・マウンテンの方々の温かい励ましに心からなる感謝をのべ、御一行の旅が無事に果されるようにと語った。

通訳として同行された、素子（もとこ）・ウォルシャフスキー女史は、現在ニューヨークに住んでおられるが、日本

のご家族は当山とのご縁の深い写真家駒沢晃先生の義姉である。

そのあと客殿に用意された席で和食を味わっていただき、宝泉寺住職の妥川師・当山の桐元師などが、巧みな会話で座を盛り上げ、なごやかな昼食会となった。

一行はこのあと総持寺に参拝するために当山をあとにしたが、長旅の疲れも見せず、輝くような笑顔でいつまでも手を振っていた。

一行は日本におけるすべての日程を全部消化し、四月二十日、ニューヨークに無事到着した。

タイ・パクナム住職を案内

パクナム住職と固い握手をかわす

那谷寺にて

当山の海外留学僧を受け入れている、タイ・ワット・パクナムの住職ご一行が来日され、五月二十九日、当山住職が案内して、大本山永平寺に参拝しました。

道元以来七百年変わることなく受け継がれてきた厳しい戒律の生活に触れて、タイ仏教と相似た点を見い出されたことでありましょう。

翌三十日は、高野山真言宗別格本山である那谷寺を訪れました。

天然岩窟に建立された本殿には、千手観音が本尊として納められ、観音札所の霊場となっています。

自然に恵まれたそれぞれの寺院に詣でて、ご一行は感激を新たにされたご様子でした。

東隆真先生祝賀会

『成寿』誌上に、「禅と衣・食・住」という興味深い原稿を、毎回お書き願って、皆様にもおなじみの東隆真先生が、この度文学博士の学位を授与されました。

激忙の中での学位取得は、想像を絶する精進の賜物であります。その努力を祝って、六月五日、ホテル・オークラにおいて祝賀会が開かれました。

当山住職、洞外文隆師、石附周行師が世話人となり、宴は盛会のうちに幕をおろしました。

ご寄付御礼

●海外留学僧派遣育英会

石川　孝禅　一万
花柳　一徳　十万
鈴木　和夫　十五万
内山　款偉　二万
宮林　昭彦　十万
栄光　道院　二万
山口　之徳　五十万
河内　義宣　二十万
日本軽金属K・K　五十万
梅の木松野幸助　十万
黒河内　貞子　一万
関口　径嗣　五万
鳥屋原百合子　一万

●成寿賛助

三浦　時宣　二万
吉原木工所　一万
石川　孝禅　一万
大道　晃仙　二万

●二童子勧請寄寄付

三浦　時宣　二万

●読者からの便り

「お釈迦さまの涅槃」をはじめとする良いお話をありがたく拝読いたしました。また御収蔵の絵画の写真を楽しく拝見いたしました。私共にも西蔵の名画を多く所蔵しており、どうも巷間で見る物と全くちがう良質の物の気がしますので、一度お目にかけることができれば幸いと存じます。

敬具

㈱日本文化資料センター　今井育雄

成寿を佛前に供え、報告しつゝ読経させて戴き、流涙を止める事も忘れ乍ら、心からの御気くばりを感謝して居ります。さいわい体の調子も良く暖かくなったら孫の顔を見ながら横浜の善光寺様の方にも行って見たいと心待ちにして居ります。本当に有難度く二回、三回と妻と読合って居ります。寒さの析柄お体に気をつけて下さいませ、先づはお礼まで

西川栄治

前略

数ある記事の中、とくに留学生諸氏の現地レポートを興味深く読ませていただいておりました、留学生の人たちの体験談は、貴重なものとおもいます。日本の仏教会ないし仏教界に新風が吹き込まれるためには、貴重な経験をもった帰国者が一人でも多く増してくることがのぞまれます先ずはお礼のことばまで

佐々木教悟

このたびは成寿第六巻を頂戴し、ありがとうございました。駒大時代の同窓で、親友の河内義宣君が貴寺の派遣でニューヨークの禅寺に行けたのだということを知り、びっくりしました。彼からの年賀がニューヨークから届いた意味がやっとわかったのです。どうか次々と三蔵法師を全世界に送られますように。

貴寺益々の御清禅を祈念し御礼といたします。

吉津宜英

謹啓上

貴山ご法統いよいよご清栄の趣衷心よりお慶び申しあげます。先頃は成寿第六号をご恵送賜り有り難とうございました。

数多玉章を拝読いたしました中でスリランカに学んでおいでの中野良教禅士の五十一頁の〃日本とスリランカとの仏教交流について〃のご指摘味読いたしました。

私共は来る二月九日夕刻成田を発ち一週間彼の国を訪問します。何かございましたらお電話ください。お役に立てましたらと存じまして一筆

いたしました。
皆様のご自愛をお祈りしつつ御礼まで申し上げます。
二月三日　合掌　上坂之一人拝

比の度は早速に留学僧公募の資料お送り下さいまして有難うございました。知人にお勧めするつもりでおります。
又、全く思いがけなく「成寿」六号を拝読させて頂くご縁を得ましたこと、この上ない喜びでございます。どの頁を開きましても化仏が飛び出して来そうな迫力に唯々驚きと歓喜に言葉もございません。中村元先生の寄稿文をはじめ、山主様、老師様の御法話その他の方々の一言一句より浄らかな熱情が読む者の心に伝って参ります。
お写真の頁にも魅かれ眼を瞠りましたが、表紙絵や挿画の素晴らしさ十一面観音様の今にもお口が繞びすずやかなお声が聞えるのではないかと思われます。大悲の面差しに故もなく涙が溢れ合掌致しておりました。
留学僧海外派遣という宗派を超えての遠大なる御計画、世界中の迷える者達の救ひとなることでありませう。「成寿」の賛助に加へて頂ければと些少ですが同封致します。御笑納下さいませ
善光寺様の益々の御発展を念じて止みません　先づは御礼まで、
昭和六十二年三月十九日
鳥屋原百合子

前略　比の度は海外留学僧派遣育英会願書及び関係書類、早速御送付頂きありがとうございました。要項はじめ書類、資料等隅なく拝覧させて頂き育英会の御主旨に深い感銘を受けると共に聊か海外禅佛教の動向に触れ内より熱く湧き上がるものを感じました。
思うに遠く外へ目を向ければ来たるべき世紀末、二十一世紀、私共達磨門下、高祖の法孫が世界人類の抱える苦悩と精神的要求に応えるべき状況にある時、なすすべを知らぬでは、佛祖法乳の慈恩に報ゆるには余りに腑甲斐無く感ずるのは私のみでありましょうか。しかし、誠に遺憾ながら今年度の留学僧派遣申込みは一身上の都合により断念しなければなりません、拙寺の開山堂位牌堂の増改築工事のため、完成予定の今秋まで寺務に追われるからです。つきましては勝手ですが、レポートは来年の〆切まで提出させて頂き、その後理事会の御採択をお待ちしたいと存じます。何卒宜しくお願い申上げます。
向寒の折から御聖胎長養されむことをお祈り申上げます。　敬具
昭和六十二年　正月　成孝九拝

（前略）　過日は清饗の席に御招きを頂きまして、誠に恭けなく、御懇志有難く篤く御礼申し上げます。ここに遅ればせ乍ら寸楮御礼の御挨拶を申し上げます。

誠に楽しくすごさせて頂きました。その、うち溶けた雰囲気もさることながら、こうした尊い集いを設けて下さいました堂頭老師の格別の御厚情に一層の感激の念を強く味わわせていただきましたことを申し添えずにおれません。小生の事で恐縮ですが、昨年、一昨年と続けて、宗務庁主催による、国際青年年交流の参加者の為、僧堂生活体験をお世話させて頂くことがございました。その折、御互いの友好と禅仏教への期待をとりわけ亜細亜諸国の青年の関心の高さなどについて多々学び自覚させられることがございましたが、先日の如き甚深の友好の感激を分ち合う程には至り得ませんでした。従って自らの海外での色々な出合いを思い出すにつけても、間違いなく留学生諸氏がその喜びを忘れ得ぬ程に味わって下さったであろうと信じておる次第です。

そしてまた、楽しさ以上に感激致しましたことは、御老師の御声がかりで集まられた皆様の素晴らしさでございます、内外の問題に目を点じておられる方こそが能く己れの真に成すべき道すじについても真摯になり得るものならんという思いを強く実感致してまいりました。

それに比して思われるのは、関心の持たれぬ意識の低い方々も多数おられるということに就いてであります。（中略）

御老師が申されておられる「世界の終わりに際しても人を育てる」との浄行・道念の深さについて本当に尊いことであると只々合掌申し上げる次第でございます。誠に微力ではございますが、小生も何とか世界の為、仏法の為、ことに暖流と寒流のぶつかる処に生じている多くの生命活動の如き問題に対して尽力できるならばと念じておりますので、向後一層の御教導と御鞭撻を賜わります様伏してお願い申し上げます。乱筆御無礼申します。

右、取りあえず御礼まで　　合掌

二月十八日

大場満洋九拝

University.

The "Zen and Food, Clothing and Shelter" of Professor Ryujin Azuma, who obtained the degree of Doctor of Literature this March, is the third of its series. We hope many of the readers would find interest in this serial to better understand the food, clothing and shelter in Zen monasteries.

Also appears a report from a priest studying abroad under the Scholarship. At present, 5 priests are studying outside Japan, sent by the Scholarship Society; two in the United States, and one each in Thailand, India and Sri Lanka.

Mr. Lee Yoh Rin is a Chinese student currently studying at Komazawa University, devoting himself to studying Rev. Ryokan. He is a sincere student desiring to introduce scenes of Ryokan-san into China. With the recommendation of Professor Toshiyuki Iida, noted for his study of Rev. Ryokan, the Scholarship Society has decided as an exceptional case to adopt him as a Scholarship student to study in Japan.

The "Seiju" being printed in Japanese, we are afraid many of the readers may find it difficult to fully understand the contents. We hope the photos and sketches inserted could be of some help for the readers' understanding.

The Editor's Postscript

The Zenkoji's organ "Seiju" now has the pleasure of seeing its 7th issue published successfully, thanks to all the supporting readers and contributors.

This issue features articles on India. Kuroda Roshi (President) and Sato Roshi (Executive Director) of Zenko-Ji Scholarship Society for Priestly Study Abroad recently had two-week trip in India, starting from the latter part of March, to contact buddhist establishments who may accept a Japanese priest to study there, as well as to visit buddhist relics. Sato Roshi's "Our Travel in India" contained in this number sketches their experience in that country. Next year, it will be published in the form of a single book.

Early April, we had a visit of Rev. Maizumi, the chief priest of Busshinji and the superintendent of Zen Center in Los Angeles. He suggested Kuroda Roshi and Sato Roshi to visit the Zen Center in L.A. to gather information and data, and the two Roshis will visit there this autumn or later.

The article titled "My Days in India for Study" is a contribution from Doctor of Literature Jikido Takasaki, who was a professor of Tokyo University when he retired from there under the age alimit recently, and who is currently a visiting professor to Waseda

編集後記

▼本号は「インド特集」となりました。海外留学僧派遣育英会顧問高崎直道先生より特別寄稿をいただき感謝にたえません。高崎先生は四月一日東京大学教授を停年退職なされ早稲田大学客員教授となられました。

▼同じく顧問の前角博雄教師（ロスアンゼルス禅センター主管・仏真寺住職）は四月九日おこなわれた東京桐ヶ谷寺住職黒田純夫師（山主の法弟）の晋山結制に十一名の徒弟を連れて来日随侍されたが、その中の一人ローリー・大道師は両大本山に拝登して瑞世の式を挙げられた。その際前角老師は山主に対し、アメリカ禅センターを訪問取材するよう要請されたので、今秋以後に訪米が実施するかと思われる。

▼第三次留学僧、島崎義孝・岩波弘道の両師は四月アメリカに、浦田智司師は五月タイ国にそれぞれ出発した。以下留学僧はアメリカに二名、タイ国、スリランカ、インドに各一名計五名である。

▼中国の李幼麟氏は目下駒沢大学に留学、良寛研究にいそしみ、良寛さんを中国に紹介したいと念願している真摯な学徒であり、飯田利行先生の推せんもあり、特別措置として日本留学生として採用した。

▼目下制作中の矜羯羅、制吒迦の二童子は来る十一月二十八日の例祭の際開眼供養をおこなう予定である。

▼本寺光真寺では信徒会館が完成した。ついては恒例の夏祭に団体参拝する予定につき、ふるって御参加くださるようお願いします。

▼五月二十八日不動明王大祭は詩人として高名な遠藤太禅老師（小熊由美さんの実父）の法話、法要は佐藤老師を大導師として無事厳修された。

成寿　第七号
昭和六二年七月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

法乳かんのん

むら雲の如き煩悩
おどろおどろの慾念
われ生きてあれば
群がりおこるもろもろの
清からぬ思い
自虐の果なすすべもなく
つかれ果てたる旅路に
めぐり会わん観音の
大いなる乳ぶさこがれ求めて
傷だらけの足をひきずり
今日も亦歩みつづけて……
何時の日か
世俗のはてに
心安けきふる里を得ん

（遠藤太禅「観世音声を限りに」から）

寿光寺
横浜